

「平和・愛・人権」のつどい ' 9 1

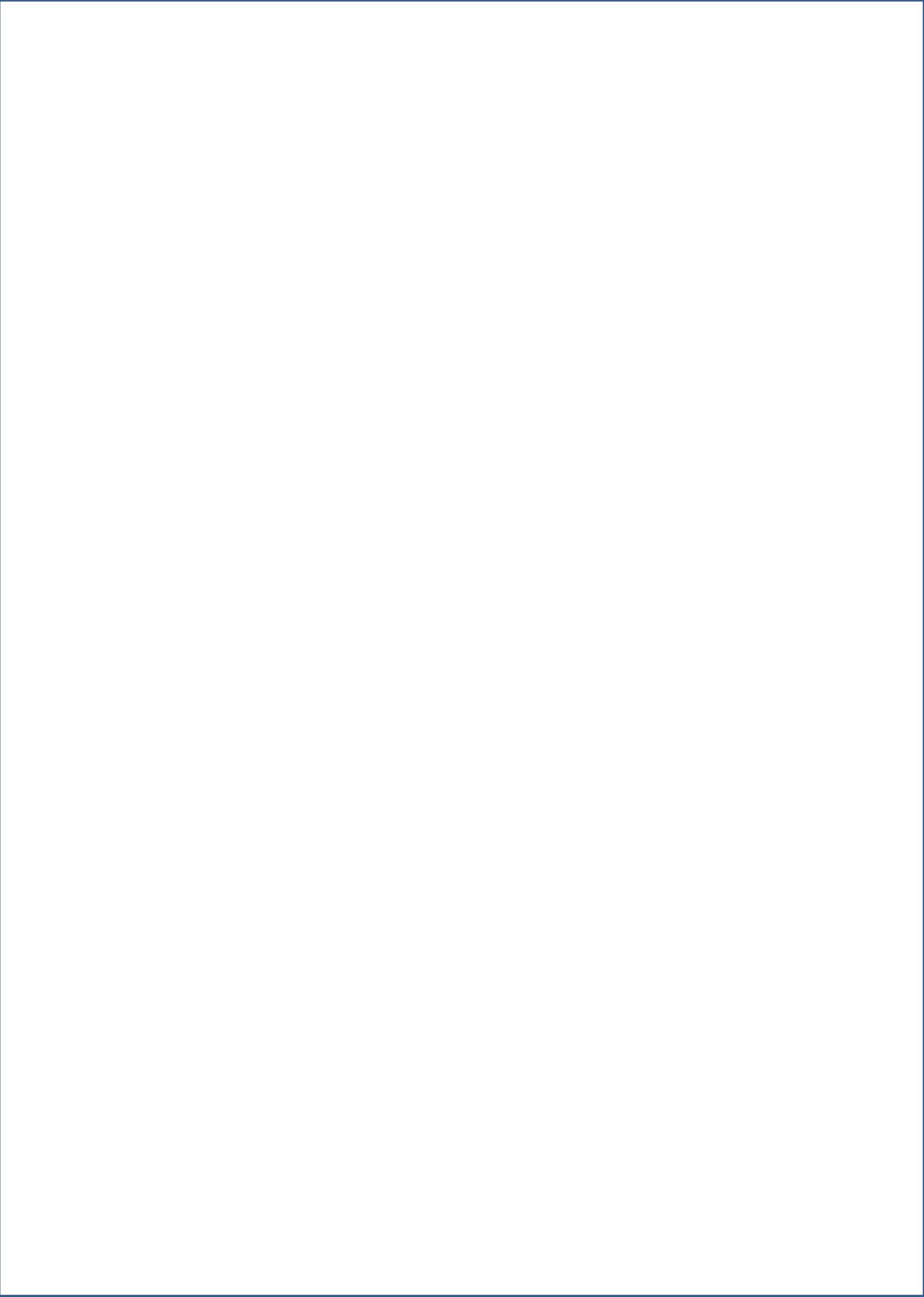
市民とともに考える

「芦屋の戦争」展

期間：1991年7月26日（金）～1991年8月15日（木）
〈7月30日，8月6日，13日（火）…休館日〉

会場：芦屋市民センター別館展示場

芦屋市・芦屋市教育委員会



【市民とともに考える「芦屋の戦争」展を開催するにあたって】

昨年の8月、イラクのクウェート侵攻で、世界は戦争に対する緊張を一気に高めました。様々な平和的解決が試みられましたが、残念なことに湾岸戦争は開始されてしまいます。私たちは毎日、テレビの映像から多国籍軍の使用する兵器の精巧さに驚く一方、夜毎繰り返される爆撃と反撃のミサイルに、46年前の日本の戦時下における空襲などの戦争体験が重なってしまいました。徴兵、食糧や物資の不足、学徒動員、学童疎開。雨のように降る焼夷弾、爆弾。広島、長崎への原爆投下……。しかも、今なお戦争の傷跡に苦しみながら生きる人々の存在は、戦争の代償がいかに大きく、そして深い悲しみを残したかを思い知らされます。

今回の湾岸戦争で戦火を浴びた人々も、同じ道を歩むことになります。戦争は、加害者と被害者の両面が同居する中で、一番弱い立場にある人々の生活を破壊し、尊い人命を奪ってきました。

8月は、お互いの人権を尊重し合い、明るい社会を築こうとする「差別をなくそう県民運動」月間であります。最大の人権侵害である戦争を、私たちは二度と繰り返さないため、市民とともに考える「芦屋の戦争」展を開催することにしました。そして、ここに展示された資料は、市民の皆様のご協力によるものです。特に今回、「戦争に徴用された船たち」の鎮魂を願ったモデルシップや、徴用船の遭難画を展示しています。また、湾岸戦争が決して遠い中東の出来事ではないということを、緊迫下のイラクに在留中帰国できなくなった息子のため、この芦屋の町で千人針の現代版である署名活動に取り組まれた藤原さんにも資料を提供していただいています。

地球社会時代の到来といわれる今日、自由で平和な世界関係が築かれることを祈念して、戦争の悲惨な実態を多くの人に語り伝えていきたいと考えます。

平成3年7月

芦屋市・芦屋市教育委員会

【目 次】

1. 戦争への道	3
2. 当時の防空体制	4
3. 芦屋市の戦時下における防空体制	8
4. アメリカ軍資料から見た芦屋市域への攻撃	11
5. 芦屋市の空襲	14
6. 西宮市の空襲	15
7. 芦屋市の学童疎開	16
8. 15年戦争による戦没者町別柱数	17
9. 満州と中国残留孤児	18
10. 戦没の船と海員に捧ぐ	20
11. 資料とともに寄せられた市民の声	21
12. おわりに	23

【資料編】

年表 — 戦争の道をたどる —	25
兵庫県下のおもな空襲（各市の「市史」から）	26
年表 — イラクによるクウェート侵攻と 湾岸戦争の終結まで —	29
展示資料一覧	31

1. 戦争への道

1931年（昭和6年）、日本の関東軍は、南満州鉄道のシェンヤン（瀋陽）付近で爆発事件が起こったのを機に、軍事行動を開始し満州全体を占領します。その後、戦火は上海に及び、翌年1月には上海事変となります。

この行動は、諸外国から強く非難され、国際連盟はリットン調査団を派遣し調査をすることになったのです。

しかしこの年の3月、軍部は、清朝最後の宣統帝溥儀^{ふぎ}をむかえ満州国を宣言します。

一方ヨーロッパでは、1933年（昭和8年）ドイツにおいてナチスが政権をとり、ヒトラー内閣が誕生します。その後、ドイツはポーランドへ侵攻し、それを契機に第2次世界大戦が始まるのです（1939年）。

また日本は、1941年（昭和16年）12月8日ハワイの真珠湾を奇襲攻撃し、太平洋戦争へ突入します。

日本が体験した、この1931年から1945年の15年戦争は、かつてないほど多くの国民が動員され、戦場へと駆り出されます。仕事を投げ打ち、家族と離れ離れとなり、中国大陸や南方の島々で戦い、その多くは、再び故郷の土を踏むことができませんでした。

同様に、戦場となった国、日本の植民地となった人々を巻き込んで、多くの人命を奪い、文化を破壊し、そして歴史に大きな汚点を残していくことになるのです。

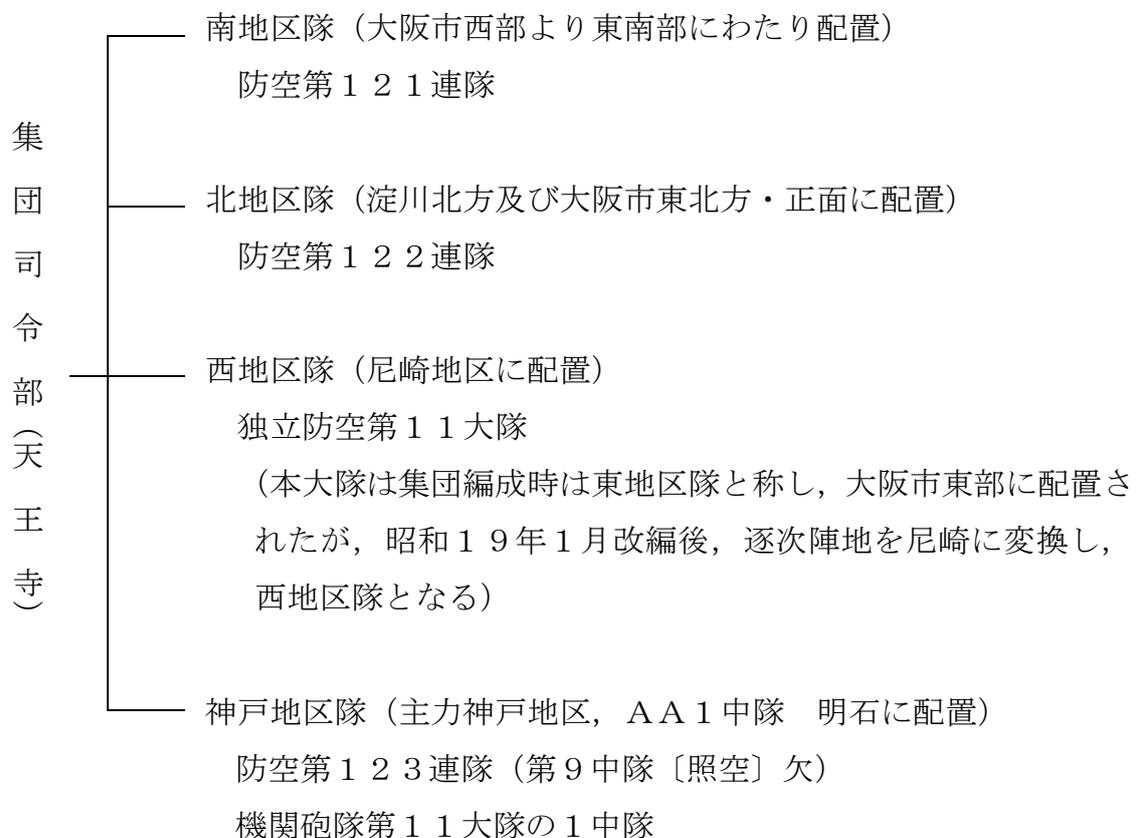
国内に残された家族の生活も、地域・職場の組織に入れられ、毎日のように行われる行事や訓練に強制的に参加させられたり、軍需工場へ動員されたのです。そのうえ厳しい文化、言論統制のもと、少しの娯楽の自由さえも許されず、すべてが戦争勝利という国家目的に振り向けられていきます。

やがて戦況が不利になる中、戦場は沖縄上陸から日本本土空襲へと移り、1945年5月芦屋にも250キロ爆弾が投下され、最初の空襲を受けることになったのです。

2. 当時の防空体制

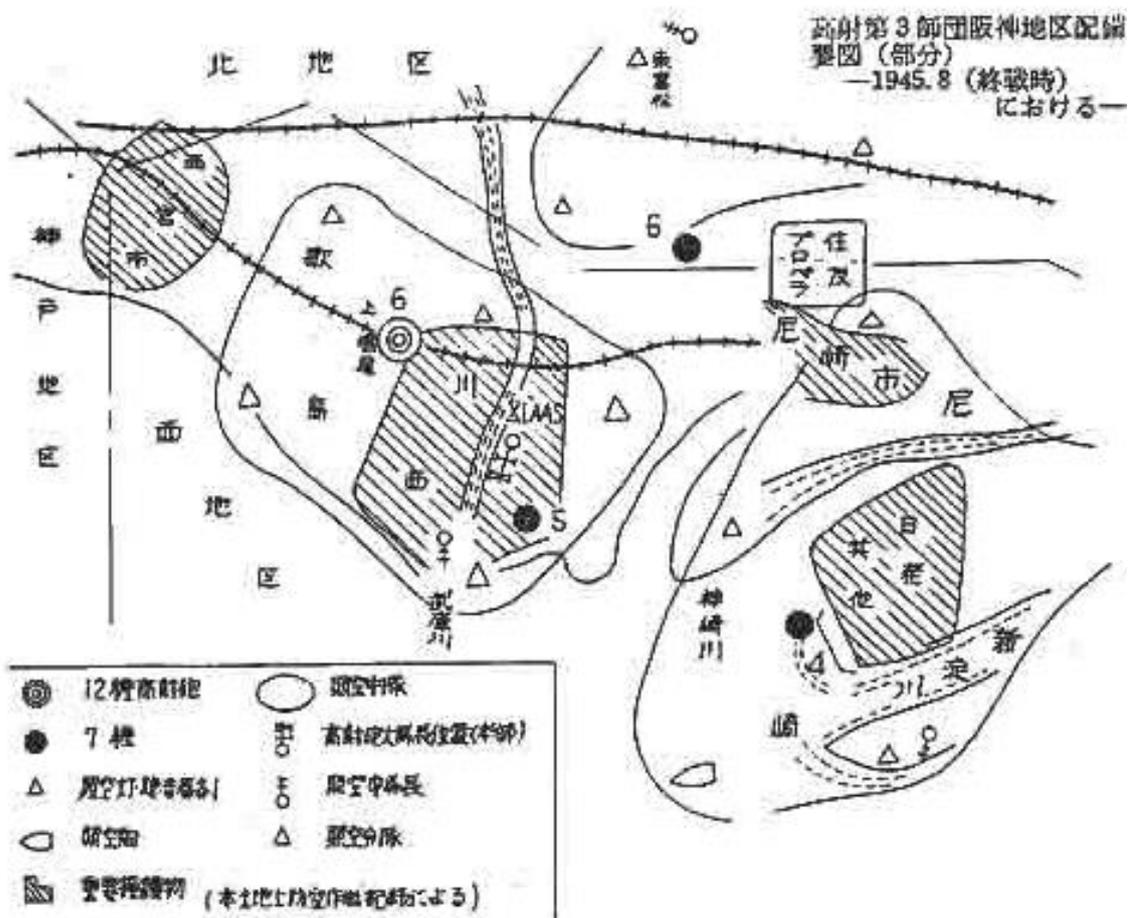
阪神地区の防空体制が初めてできたのは，昭和16年7月ごろからです。国際情勢がしだいに緊迫化し，国土防衛を考慮しなければならなくなり，中部防空隊が編成され，阪神地区の防空に当たることとなります。

この中部防空隊は，翌17年11月中部防空旅団に改編され，さらに昭和18年8月，この旅団は改編され，その指揮組織及び戦力が強化されて中部防空集団となり，中部軍司令官の指揮下へとうつつていきます。これは太平洋戦争が第3年目に入り，在支アメリカ空軍の活動が活発化し，国土防空の必要が増大したからです。中部防空集団の阪神地区における軍隊区分及び配置は，次のとおりです。



やがて昭和20年4月、戦勢はますます不利となり、本格的に本土決戦を準備せねばならなくなって、内地防衛体制が強化されます。すなわち東京に総軍指令部をおく第1総軍が鈴鹿山系以東の東日本を受持ち、広島に指令部をおく第2総軍（総軍司令官陸軍大将 畑俊六）が鈴鹿山系以西の西日本を担当することになります。

第2総軍の統轄下の第15方面軍は、司令部を大阪におき、二個軍・八個師団・三個独立混成旅団・一個高射師団を基幹としたものです。この高射師団は、中部高射集団を改編した高射第三師団であって、その主眼は大阪湾に沿い南方及び西南方より侵入を予想する敵機に対し、大阪市西部、尼崎及び神戸地区における重要施設を援護するためでした。高射第三師団の終戦時における阪神地区の配備は次図のとおりです。



以上は主として地上防空部隊ですが、本土防空の中核である航空部隊についていえば、昭和17年第11飛行師団が編成されて、防衛総司令官のもとに属し、師団司令部を大正飛行場（大阪市東南側）におき、中部軍司令官の指揮下に入り、阪神及び名古屋要地に侵入する敵機を撃滅する任務をもつこととなっていました。昭和19年12月ごろから20年3月はじめにかけて、B29は南方基地から単機でしばしば阪神地区に飛来し、偵察を行い、一方爆撃編隊は阪神爆撃の体制を示しつつ、阪神・京都付近をへて名古屋を空襲し、阪神地区に対して多分に神経戦的効果を狙うようになりました。やがて昭和20年3月中旬から阪神地区に対するB29の夜間大空襲が開始されるにいたり、またアメリカ機動部隊の艦上機群は、3月19日延120機をもって大正・伊丹両飛行場を攻撃し、さらに4月下旬になって、沖縄の小型機の基地からP51が阪神地区に来襲し、空襲をまぬがれない情勢になっていきます。第11飛行師団は、昭和19年12月第6航空軍司令部の編成にともない、その所属となり、のち昭和20年7月、本土決戦にそなえて編成された航空総軍（編成は4月）の直轄となり、中部軍司令官の指揮下をはなれました。

終戦直前（7・8月）における第11飛行師団の配置は次のとおりです。

なお、同飛行師団は阪神地区の防空戦闘に関しては、海軍第332空を指揮下においていました。したがって阪神地区の防空戦闘には三式戦闘機のほか、昭和19年末から海軍第332空所属の「月光」（通称「伊丹」）・「雷電」（通称「鳴尾」）が活躍していました。（この海軍第332空はやがて奈良に設立された海軍指揮機関のもとに入り、第11飛行師団の指揮下をはなれます。）

戦 隊	機 種	所 在 地	機 数
5	複 戦	清 州	2 2
5	三式戦	小 牧	2 0
5 6	三式戦	伊 丹	2 2
4 6	三式戦	大 正	1 8

このような阪神地区の防空防衛力に比べてアメリカ空軍は5月以降逐次機数をふやし、ついに延べ200～400機にも及ぶ機数で空襲を行うようになりました。高射第3師団の昭和20年6月7日付作戦記録には、「1030B29約250機主として淀川ぞいに大阪北部及び東北部を焼夷攻撃す。敵は雲上よりレーダー爆撃を行い、全然敵影を認むる能わず、師団は辛うじて電測射撃を実施せるも戦果なし」と記されています。また、同記録は、7月・8月の戦況を、「弾薬の射耗は製造能力をはるかに上回り、当時大本営にては現況を以て推移せば、高射砲弾薬は本年末に至らずして枯渇すべしとの悲観的判断を下しあり。金質信管の性能等も低下して往々不発弾を生ずる状況なり」とし、作戦末期の状況として、「圧倒的に優勢な敵の空襲下に阪神一帯市街の大半は焼土と変じ、工場地帯もまた無惨なる残骸と化して民心の動揺は覆い難く、重要生産もまたほとんど活動を停止す。突如8月6日広島、次で9日長崎に投げられたる二個の原子爆弾は軍民に深刻なる不安焦燥を与えたり」と記しています。こうして地上防空力は0に等しく、また防空戦闘力も終戦直前には0に近かったことは、さきに掲げた第11飛行師団配備表によってすでに明らかです。（『歴史と神戸No18』から一部抜粋）



冊子『家庭防空』の表紙（芦屋市三条会提供分）

3. 芦屋市の戦時下における防空体制

1937年（昭和12年）7月施行され、以来繰り返された防空演習の経験も、対中華民国戦争にとどまらないで、世界戦争へ突入が感じられる1941年（昭和16年）に入ると、従来からの防護準備では十分でない事が考えられ、より充実した態勢が望まれるようになりました。

市では「芦屋市永年防空計画並ニ昭和十六年度芦屋市防空計画」を立て、その設置について、知事に申請し許可を得、これに基づいて「本市防空施設及資材整備費ニ充ツル為」に、昭和16年度に限って「条例ノ改正ニ依ルコトナク別個の本市税臨時増徴ニ関スル条例ノ設置」（理由書）を県に申請し許可を得て10月13日、追加更正予算を計上、うち防空費として64,854円、警防費として1,994円を挙げるなど、防空体制の強化に努めています。

この追加内容は、防空費のうち資材整備費が63,754円を占め（既定予算額975円）、その内訳（市事務報告書）は、

① 警報ニ関スル施設

メガホン	100個	1円30銭（1個）	130円
クラクション	24個	4円（1個）	96円
拍子木	24個	2円（1組）	48円
総計			274円

② 燈火管制ニ関スル施設

残置燈	35燈	10円（1燈）	350円
標識燈	100燈	2円（1燈）	200円
懐中電燈	170燈	2円（1燈）	340円
燈火遮蔽設備（防空暗幕）			3,000円
総計			3,890円

③防火施設

貯水槽	10ヶ所	7円	70円
防空井戸新設及 改造, 水路修繕	5ヶ所	400円	2,000円
総計			2,070円

④防毒救護施設

防毒面	400個	14円50銭	5,800円
(防毒面	50個	2円	100円)
			(値上りに依る差額)
防毒衣	30枚	40円	1,200円
防毒器具			250円
救護用器具, 薬品代			3,312円
防毒室設備	2ヶ所	100円	200円
簡易防空壕	20ヶ所	500円	10,000円
総計			20,862円

⑤工作施設

橋梁応急資材			4,346円
土木関係応急資材			4,994円
水道関係応急資材			2,834円
市営造物擬装費			2,800円
総計			14,974円

⑥配給施設

防空従事員及避難者	1800人	1人	1日ニ付
白米2合 副食物	20銭	30日分	15,984円

⑦其他現品確保ニ要スルモノ

本炭	1000俵	3円(1俵)	3,000円
ローソク	3000袋	0.9円(1袋)	2,700円
総計			5,700円

となっています。

警防費既定予算額22,929円は、警防団需要費で、追加の内訳は消防用器具の整備で、次のとおりです。

警防費のうち消防用器具費

伸縮梯子	3個	78円(1個)	234円
消防用ホース	10本	40円(1本)	400円
ファイバーヘルメット	100個	12円(1個)	1,200円
ロープ	1000尺	16銭(1尺)	160円
総計			1,994円

4. アメリカ軍史料から見た芦屋市域への攻撃

芦屋市域は、B29（超空の要塞）による爆撃を1945年（昭和20年）5月11日の爆撃攻撃、6月5日、15日、8月6日未明の焼夷弾攻撃と計4回も受けています。これらの爆撃を、アメリカ軍の「戦術作戦任務報告書」（Tactical Mission Report）からどのように行ったのか、みてみたいと思います。

1945年（昭和20年）3月10日未明の東京大空襲から無差別焼夷弾作戦がはじまりました。この作戦は、まず大都市に対して行なわれ、6月15日大都市が壊滅した後は、日本各地の中小都市がその目標となりました。また、中高度からの軍需工場への通常爆弾による昼間攻撃も加えられたのです。

アメリカ軍の5月11日の攻撃は、芦屋市域への最初の空襲となります。これは、川西航空機甲南製作所（武庫郡本荘村、神戸市東灘区青木地区）を第一目標とした、通常爆弾攻撃で、投下爆弾は、500ポンド（約250キロ）通常爆弾によるものです。投下時間は、午前9時53分から10時3分にかけてのわずか10分間でした。この日の芦屋市域への爆撃は、この川西航空機をはずれた爆弾によるものでした。

6月5日午前7時22分から8時47分、神戸市東部への焼夷弾攻撃が行われました。

この攻撃の結果、損害は神戸市街地だけでなく、御影、西宮にまで及びました。

2回目の芦屋市域への投弾は、この攻撃の余波によるものです。

6月15日に目標となったのは、大阪、尼崎の市街地です。この日の午前8時44分から10時55分にかけて、B29、444機が、焼夷弾攻撃を行っています。この焼夷弾の一部が、芦屋市域にも落ちたのです。

戦術作戦任務報告書

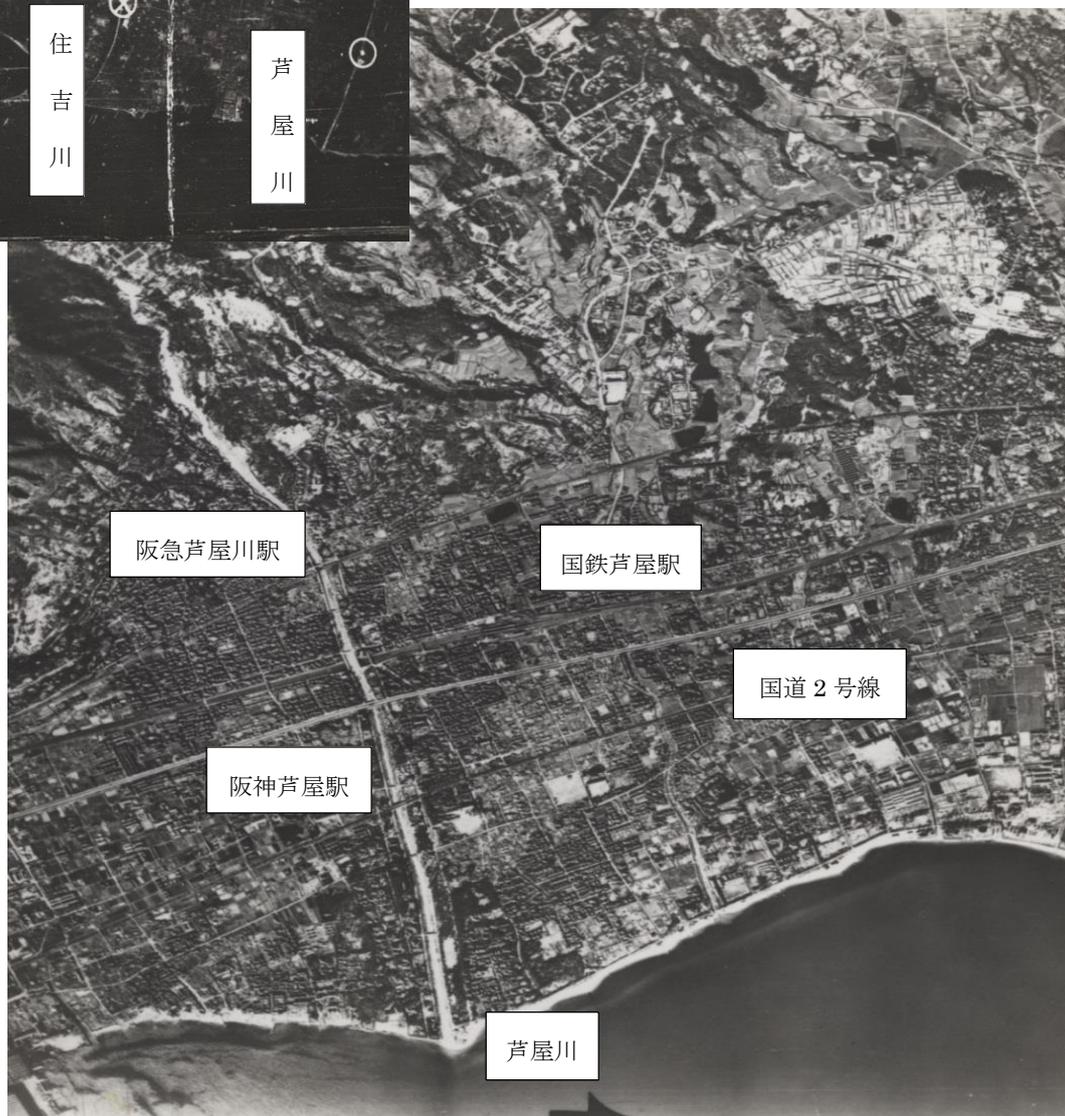
「戦術作戦任務報告書（Tactical Mission Report）」とは、グアムにあった第21爆撃機軍団（1945年7月16日、第20航空軍に改編）の司令部が、爆撃を行うたびに作成した報告書である。

内容は、本文にあたる戦術説明、付録部分の作戦、気象、通信、情報、総合統計概要、戦闘命令、配布の7部門で構成。地図・写真・図表も適宜含まれ、攻撃側からの貴重な第一資料となっている。

8月6日未明、西宮・御影の市街地に焼夷弾攻撃が加えられます。これが後
にいう阪神大空襲です。この日攻撃に参加したB29は、グアム北飛行場を飛
びたった第314航空団の4群（先導機17機，レーダー対策機2機，風程観



測機1機，救難機1機を含む134機），サイ
パン・アイズリー飛行場を飛び立った第73
航空団の4群（レーダー対策機2機，風程観
測機1機，救難機1機を含む135機）の計
269機でした。



上の写真は、8月6日未明爆撃時の芦屋・御影の平均弾着点（爆撃の中心点）を示したもの。
⊙は第314航空団，⊗は第73航空団と第314航空団の平均弾着点。この写真から、芦
屋を目標にしていたことが分かる。

下の写真は、戦後連合軍が写した芦屋の戦災の戦況。戦災で焼失した地域がわかる。

当時アメリカ軍は、目標にあらかじめ中心となる点（平均弾着点）をきめ、そこに優秀なレーダー操作手を乗り込ませた先導機に投弾させ、その火災を目印に後続機が投弾するやり方をとっていました。報告書には、芦屋の地名は記されていませんが、航空写真に示された、3か所の平均弾着点のうちの1か所は、明らかに芦屋です。

戦闘命令によると、芦屋とみられる地点には、第314航空団の4群のうち3群が、攻撃を行うことになっていました。

搭載弾は、M69、6ポンド焼夷弾を内蔵したE46集束弾（統計にはM19。E46と同じもので、名称変更しただけ）、爆発すると即座に火災が発生し、次の機目標を示すAN-M47A2、100ポンド焼夷弾、人員殺傷用のT4E4破碎集束弾、AN-M46照明弾でした。さらに航空団あたり2機の先導機は、500ポンド通常爆弾を搭載するものとされていました。

6日午前0時25分、先導機が投弾をはじめ、御影・芦屋を攻撃した第314航空団の125機は、午前1時36分までの71分間、12,600フィート（約3,840メートル）から14,700フィート（約4,480メートル）の高さから攻撃を加えました。また、第73航空団の130機は、御影・西宮に午前0時38分から2時1分にかけて投弾したのです。この結果、御影、芦屋、西宮の全市街地9.46平方マイル（約24.5平方キロ）の29.6%すなわち2.8平方マイル（約7.2平方キロ、従来の損害をあわせると、37%、3.5平方マイル）に損害を与えたと、報告されています。

これまでの芦屋への攻撃の多くは、神戸、大阪大空襲のながれ弾によるものです。しかし、8月6日には、御影・西宮地域のなかに芦屋市域ははっきりと含まれ、意図的に攻撃されたことは、間違いありません。（佐々木和子）



防護用マスクをつけて防空演習（芦屋公園）

5. 芦屋市の空襲

芦屋市は4回にわたる空襲を受け、焼失面積は55万9千坪（兵庫県の都市計画：1960），罹災者は総人口の約5割，家屋は総戸数の約4割に及び，特に学校校舎は8割を失う結果となりました。

【空襲被災状況】

月日 種類		月日				計
		5. 1 1	6. 5	6. 1 5	8. 6	
投弾種類		爆 弾	焼 夷 弾	焼 夷 弾	焼 夷 弾	
投弾数量		大型 41	約 1,200 外に小型 爆弾 15	約 500	約 1,500 外に小型 爆弾 40	
人的 被害 (人)	死 亡	3 9	1 1	0	8 9	1 3 9
	重 傷	8	5	0	4 4	5 7
	軽 傷	8	0	0	8 5	9 3
	行方不明	0	0	0	2	2
物的 被害 (戸)	全 焼	0	1 1	3	2, 7 3 2	2, 7 4 6
	半 焼	0	0	0	8 7	8 7
	全 壊	8 4	0	0	1 1	9 5
	半 壊	9 1	0	0	3 5	1 2 6
罹災者数 (人)		9 6 2	8 1 2	1 8	1 6, 3 7 9	1 8, 1 7 1

(市事業報告)

6. 西宮市の空襲

参考に、隣接している西宮市空襲被害の全体的状況を調べてみると「昭和22年版西宮市勢要覧」では、次表のようになっています。

この表によって罹災者は、昭和19年の総人口（127,457人）の約52%に当たり、しかも、罹災者総数の約85%は、芦屋市と同様に終戦直前の8月6日の阪神大空襲によるものであったことがわかります。

芦屋市に無い西宮市の7月24日の空襲は、当時宝塚市にあった川西航空機宝塚製作所に対する艦載機150機の爆撃の余波によるもので、甲東園方面が被害の中心となっています。

被空襲 月 日	投弾 種類	同左 数量	人 的 被 害 (人)			
			死 亡	重 傷	軽 傷	行方不明
5. 1 1	爆 弾	不明	8 5	1 0 0	1 5 0	—
6. 5	焼夷弾	不明	3 0	6 0	1 3 0	—
6. 1 5	焼夷弾	不明	1 0	4 3	6 0	—
7. 2 4	爆 弾	不明	2 7	3 0	3 0	—
8. 6	焼夷弾 爆 弾	不明	4 8 5	6 5 0	1, 1 0 0	—
計			6 3 7	8 8 3	1, 4 7 0	—

被空襲 月 日	物 的 被 害 (戸)				罹 災 者 数 (人)
	全 焼	半 焼	全 壊	半 壊	
5. 1 1	1 9	3	1 8 5	2 2 0	2, 5 8 0
6. 5	1, 2 0 7	2 8	1	3	4, 9 7 9
6. 1 5	3 0 8	3 2	—	1 2	1, 3 3 6
7. 2 4	5	2	9 8	1 5 0	1, 0 3 6
8. 6	1 3, 4 6 4	8 6	5	2 5	5 6, 5 9 1
計	1 5, 0 0 3	1 5 1	2 8 9	4 1 0	6 6, 5 2 2

7. 芦屋市の学童疎開

1941年（昭和16年）4月1日に、小学校が国民学校と改称されてからは、一層軍国主義教育の風が強くなりました。少年団を結成したり、防空訓練や勤労奉仕（浜の甘藷作りなど）の行事が加わりました。

戦局が不利になり、本土空襲が活発化するにつれて1944年（昭和19年）7月8日に学童疎開促進要項がでます。芦屋が疎開の対象地域になったのは、20年3月で、6月に入って、精道、宮川の両国民学校に集団疎開の指令が出されます。

すでに4月4日に、山手国民学校では児童の縁故疎開を行っており、精道国民学校では、7月1日、3年生以上の223名に各学年2名の引率教員がついて、岡山県上房郡に集団疎開をしました。3～5年生は高梁町（現 高梁市）の頼久寺らいきゅうじに、6年生男子は川面に、それぞれ分散し合宿生活を送ったのです。ただし、1～2年生の児童はこれに加わらず、縁故疎開でした。その中で市内に残留した学童は793名です。集団疎開児童は10月10日に帰校しますが、教員は残務整理をしたのち11月に帰ってきました。

一方宮川国民学校では、同じく岡山県川上郡落合村福地大福寺しろちに疎開本部をおき、富家村ふうか、手荘村てのしょう、落合村、高倉村の7カ所に分散して疎開しました。3年生以上の児童207名、付添教員は9名です。児童は10月7日に帰校して、教員は月末に帰ってきました。

疎開中は地元の小学校と連絡を密にして学習にはげむほか、燃料の薪を集め、食料の補いに魚をとり、甘藷栽培を行ったりしました。降雨がなく、飲料水や、風呂の水にも困ったこともあります。また、9月の台風期には交通路が壊れ、梅酢の味つけで麦の雑炊を1週間もすすったこともありました。

（『芦屋市史』から抜粋）



高梁駅についた集団疎開の児童

8. 15年戦争による戦没者町別柱数

1972（昭和47）年7月現在

戦没者柱総数 820 柱

町名	戦没者柱数（柱）	町名	戦没者柱数（柱）
六麓荘町	8	春日町	34
朝日ヶ丘町	35	打出小槌町	11
山手町	7	宮塚町	28
山芦屋町	17	茶屋之町	23
岩園町	24	大榊町	15
東山町	15	公光町	17
東芦屋町	14	川西町	10
西山町	22	津知町	19
三条町	35	打出町	22
翠ヶ丘町	26	南宮町	17
親王塚町	9	若宮町	24
大原町	27	宮川町	11
船戸町	13	竹園町	19
松ノ内町	24	精道町	12
月若町	8	浜芦屋町	12
西芦屋町	10	大東町	26
三条南町	20	浜町	15
楠町	15	西蔵町	21
上宮川町	33	呉川町	26
業平町	17	伊勢町	27
前田町	11	松浜町	12
清水町	17	平田町	12

9. 満州と中国残留孤児

昭和20年8月9日午前0時、突如ソ連軍は満州に攻撃を開始します。

これに対する75万の関東軍は、各地で激戦を展開。しかし、兵力に劣る関東軍は、たちまち敗退しました。

その中で、満州東部国境の東寧地区とうねいに配属されていた、第一国境守備隊の独立歩兵第783大隊の将兵は、最後まで「勝鬨陣地」かちどきを始め「勾玉陣地」まがたまを守り抜き、8月26日終戦の通達を参謀から受け、18日間にわたる戦闘の幕を閉じました。

当時の満州には、開拓団などとして、相当数の一般民間人が生活をしていました。敗戦による混乱の中で、成人男性は、兵隊、民間人の区別なく、ほとんどの人がソ連軍の捕虜となります。残された女性、子ども、老人たちは、身の安全を求め、ハルビン・吉林市等きつりんにあった日僑難民収容所へ向かいました。その道中は悪条件下にあったため、難民収容所にたどり着くまでに親が死んだり、親とはぐれたり、さらわれたりする子どももいました。難民収容所にたどり着いても、病気などのため、親が3,000人も亡くなっています。

また、ソ連軍に追われた人々が、子どもたちだけ残り集団自決した例もあります。

これらの子どもたちが、中国残留孤児となったわけです。

中国全体から見て、残留孤児は、黒龍江省、吉林省、遼寧省に集中しています。

戦後46年。異国に一人残された孤児たちは、今も戦争の傷跡を心に受けたまま、肉親を求め熱い思いを日本に注いでいます。

(中国引揚者相談員 松原 東)

【中国残留孤児の概況】

(平成2年1月1日現在)

1) 孤児の肉親調査の概要

(1) 孤児総数	2, 272人
(2) 身元判明者数	1, 201人
うち訪日調査による判明者数	609人
(3) 訪日調査実績	
○訪日人員数	1, 680人
○身元判明者数	609人(判明率36.3%)

2) すでに永住帰国した者の数

判明者	536人
未判明者	622人

3) 現在中国に残っている孤児数

判明者	665人
未判明者	449人

【中国引揚者阪神間居住状況（昭和47年以降）】

(平成2年4月2日現在)

	世帯	人数
芦屋市	3	11
尼崎市	25	78
西宮市	17	49
宝塚市	19	62
伊丹市	22	70
計	86	270

10. 戦没の船と海員に捧ぐ

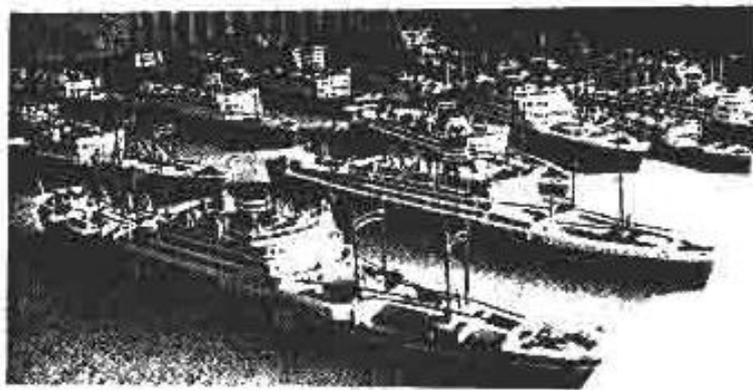
先の太平洋戦争において戦禍の犠牲となったわが国の商船は、二千五百隻、八百万総トン数に及び、かつて世界第三位を誇った日の丸商船隊は完全潰滅の悲運を蒙った。また、船と運命を共にした海員は、六万余名、その損耗率45%は、陸海軍将兵の20%を、はるかに超え、平和なる海は、一変して「慟哭の海」と化した。

戦後四十年、軍艦については、かの戦艦「大和」「武蔵」をはじめ多くの有名艦の活躍が今も戦記を賑わわせ、模型や写真によって回顧され、今も話題となることが多いが、一方、商船については、「鎌倉丸」「浅間丸」「新田丸」「あるぜんちな丸」「ぶら志る丸」等かつて日本を代表し、豪華優秀船として広く国民に親しまれた船たちも、今日では、その名前や存在さえ記憶から消え去ろうとしている実状である。

就航わずか一航海で徴用された船、華麗なる船姿を浮かべること一年にして空母に改造されて散った薄幸の豪華船、戦火の海に死力を尽くし没した船等、それぞれの運命は尊くも悲しいものばかりである。

かつて平和の海の交易に尽くし、祖国に殉じたこれら商船の面影を偲び、在りし日の容姿を復元して、追憶と鎮魂のよすがとすることを願った。ひそかに名づけて「鎮魂のモデルシップ」と呼び、一隻また一隻と、“忘却の海底”より祖国に呼び戻したき一念を込めて製作に当たった。これらの小さい船を、戦前の商船隊への限りなき愛惜と、平和への深い祈りの記念碑としてご観賞いただければ幸いである。

佐藤明雄



1 1. 資料とともに寄せられた市民の声

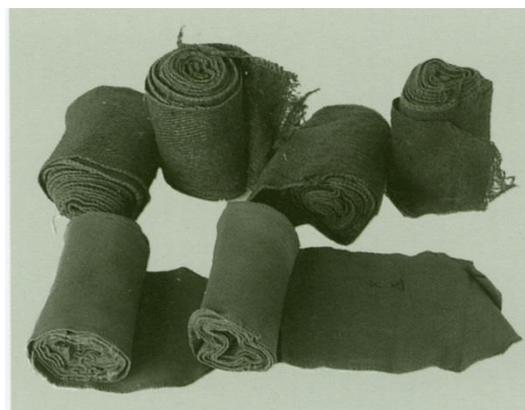
・ 8月5日夜、サーチライトに照らされた何百の飛行機の大群を、当時松ノ内町の畑のそばにあった防空壕の中から見上げていました。トンボを取る網でサッと取れたらどれだけ助かるのにと、出来ない事だと思いつつもその様なことを空想しながら無事を願っていました。戦争は、二度と嫌です。

・ ゲートルが傷んだりすると、夏用の帯芯を利用して、これまでの物に形を合わせ、周囲をミシンで縫って染色し、新しいゲートルを作ったものです。

・ アメリカ軍が、電波を妨害するため2センチ幅程度のアルミテープを落とししたが、それがよく電線に引っ掛かっていました。当時娘時代の好奇心から、このアルミテープをこわごわ竹ざおでとったことを覚えています。

・ 焼夷弾の中身を、乾いた溝の高い方から蓋を開け、流して処理したこともありました。

・ 戦争中の体験を話しても、若い人は誰も本当にしてくれなくなりました。40歳代の人でも戦争当時の事を知っている人は、少ないようです。



防空頭巾とゲートル

・色々なコレクションがありますが、人を殺める物より、人を守る物を収集の対象にしたいと考えていました。人間の一番大切な頭を守る物が帽子であることから、様々な帽子を集めるようになりました。

・私の辛い戦争体験は、我が家の宝です。絵本にまとめ、子・孫へ二度と戦争を起こさないメッセージとしています。

・空襲で、家や財産が焼失し、そのうえ焼夷弾による猛火から逃げる途中、子どもに怪我をさせてしまいました。当時は小さく残った火傷の後が、子どもの成長と共に大きくなり、それを見るたびに今も心が痛みます。

・焼夷弾による猛火から逃げる時私達の生命を守ってくれた防空頭巾などの品物は、なにものにも代えがたい財産として、今も大切に家の宝として保管をしています。

・当時はよく分からなかったが、戦後、戦争関係の資料を見るにつけ、日本はアメリカと比べ科学力を始めすべての面で劣っていたことが理解できた。本当に無茶な戦争をし、多くの犠牲者を出したことに今も憤りを感じている。



防護団のタスキと腕章（芦屋市三条会提供分）

12. おわりに

戦争展は、今年で4回目を迎えます。

1986年（昭和61年）に、市民センターの別館展示場で「平和を考える本」展を、西宮市立真砂中学校の岡田龍一氏の協力を得て開催しました。この展示は、広島、長崎に投下された原爆に関する本を展示したものです。来場者には、展示された本だけでなく、直接内容を見ていただく「ふれあい展示」コーナーを設け、また期間中は「平和を考える～ヒロシマ・ナガサキ～」と題して岡田氏に講演もしていただきました。

これを契機に、戦争遺品の実物などを展示し、戦争による惨禍を風化させないように継続・発展させていくことが課題として残りました。そこで戦争関係の展示を経験されたり、また研究されているなど多くの皆様の協力をいただき、その2年後の1988年（昭和63年）に、市民センターの別館展示場で第1回目の戦争展を“苦い思い出を再現する「戦時下の生活」展”としてスタートさせることができました。そして1989、90年（平成元年、2年）は名称を“市民とともに考える「芦屋の戦災」展”に改め開催してきました。

しかし、今回は“市民とともに考える「芦屋の戦争」展”と名称を変えています。これは、昨年8月2日のイラクによるクウェート侵攻と、今年の1月17日の多国籍軍がイラク、クウェートを空襲して開始された湾岸戦争も含めて展示するためです。湾岸戦争の様子が毎日のようにテレビで報道され、戦争をあたかもテレビゲームのような感覚で見ている時、実際には爆弾などによって、人間の生命が奪われている現実があることを痛感したからです。

戦争は、何時の時代でも、どのような目的であっても、多くの人々の生命を奪い、生活を破壊し、そして深い悲しみを残してきました。46年前の戦争の惨禍を風化させず、そして、湾岸戦争も私たちの身近な教訓として、平和の尊さを再認識し、私たちは二度と戦争を起こすことのないよう、共に平和と人権を守り育てていきたいものです。

【資 料 編】



軍隊へ入営する時に軍隊手帳
などを収容した奉公袋

兵庫県下のおもな空襲（各市の「市史」から）

1942年	4月	18日	本土初空襲B25 1機神戸へ。 兵庫区に投弾，死者1人。
1945年	1月	3日	神戸。B29 1機神戸上空へ。
		19日	川崎航空機明石工場。B29 63機が明石を爆撃，明石，伊川谷村で死者347人。
	2月	20日	明石，阪神間。B29 1機が投弾，死者1人。
		4日	川崎，三菱造船所。B29 85機が神戸市林田区，兵庫区，湊東区に投弾，死者26人。
		5日	神戸。B29 4機が来襲，死者1人。
		6日	神戸。B29 5機が灘区，神戸区などに投弾，死者14人。
		7日	神戸。B29 2機。
		8日	神戸。B29 1機が葺合区投弾，死者13人。
		9日	神戸。B29 3機。
		16日	神戸。B29 1機。
		18日	神戸。B29 1機。
		23日	神戸。B29 1機。
		25日	神戸。B29 数編隊。
	3月	4日	神戸。B29 2機。
		7日	神戸。B29 8機。
		10日	東京大空襲。死者8万8700人。
		12日	名古屋大空襲。
		13日	大阪大空襲。尼崎に初の犠牲者（死者）。神戸でも死者2人。
		17日	神戸大空襲。B29 60機が来襲，神戸市の西半分が全滅した。死者2,598人。負傷者8,500人余り，罹災者は23万6000人にのぼった。
		18日	神戸。グラマンが機銃掃射，死者1人。
	4月	19日	神戸。グラマン数十機。
		1日	神戸。B29 2機。
		11日	神戸。B29 数機，死者2人。
17日		神戸。B29 1機。	
22日		神戸。B29 2機，死者37人。	

1945年	4月	30日	神戸。B29 1機。
	5月	3日	神戸。B29 6機。
		4日	神戸。B29 8機。
		6日	神戸。大型機6機，神戸港へ機雷投下。
		11日	川西航空機甲南製作所。B29 60機が神戸市灘区，武庫郡を爆撃，死者1，203人，負傷者824人。また，芦屋市も初空襲を受け，死者39人（西宮市85人）を出した。
		12日	神戸。B29 1機が投弾，死者13人。
		17日	神戸。B29 2機，死者9人。
		27日	神戸。B29 1機。
	6月	1日	尼崎。長州，杭瀬地区などで死傷者500人。
		5日	神戸大空襲。B29 350機が来襲，神戸市の東半分と須磨区は灰燼 <small>かいじん</small> に帰した。神戸市と武庫郡，有馬郡の死者3，454人，負傷者6，094人，罹災者21万3，000人。芦屋市では死者11人。西宮市でも死者30人が出た。
		7日	尼崎，武庫郡。B29 250機。
		9日	明石。B29 25機が明石の市街地を空襲，死者644人。負傷者593人。
		10日	神戸。B29 2機
		15日	西宮，尼崎，芦屋，伊丹。B29 300機のうち5つの梯団が来襲，阪神間に大きな被害を与えた。
		17日	神戸。B29 6機，機雷投下。
		21日	神戸。B29 6機，機雷投下。
		22日	明石，神戸，姫路。明石で死者28人，神戸で死者16人，初空襲の姫路でも大きな被害が出た。
		26日	明石，尼崎，玉津町。明石では全世帯の51%にあたる9，100余戸が被災，死者355人。尼崎でも50数人の死傷者を出した。
		27日	神戸。B29 12機 機雷投下。
		28日	明石。
		29日	神戸。

1945年	7月	1日	神戸。B29 2機。
		4日	姫路。
		6日	神戸。
		9日	神戸，西宮，伊丹。B29 4機， P51 50機。
		10日	尼崎，神戸。P51 6機が機銃掃射。
		15日	尼崎。
		19日	尼崎。P51 8機，B29 3機。
		20日	神戸，西宮，尼崎。B29 50機。 神戸市内での死者は28人。
		22日	神戸。
		24日	川西航空機宝塚製作所。西宮，宝塚，明石，加古川。艦載機など150機。川西航空機での死者は約120人，西宮の死者27人。
		25日	阪神間。
		28日	姫路，加古川，高砂，相生，赤穂など播州一円と淡路沿岸。P51 延べ1，100機。
		30日	神戸，姫路，加古川，伊丹。グラマン340機。
	8月	1日	神戸。P51 20機，機銃掃射。
		2日	神戸，姫路，阪神間。グラマン，P51 45機。
		5~6日	阪神大空襲。B29 130機。空襲は尼崎，西宮，芦屋，武庫郡のほか神戸，姫路にもおよび，死者は930人を上回った。
		7日	神戸。機雷投下。
		8日	神戸。P38，P51 70機，機銃掃射。
		9日	尼崎。死者19人。
		11日	神戸，武庫郡。B29とP51，死者54人。
		14日	神戸，武庫郡。B29，艦載機，機銃掃射。 (「神戸大空襲」から)

年表－イラクによるクウェート侵攻と湾岸戦争の終結まで①－ (岡本宏美氏 資料抜粋)

時 期	イラクを中心とした動き	クウェートの対応
1988年8月 イ戦争停戦時	<ul style="list-style-type: none"> クウェートその他の湾岸諸国に不満を持ち始める。 イランがイスラム教原理主義でアラブ全域を制覇しようとしていることに対決してイラクは戦ってきた。クウェートその他の湾岸諸国がイラクの戦争で払った犠牲に対して支援・感謝をしないのは許せないと激怒。 	イラク側が金や領土を要求するたびに、債権問題を持ち出す。
1990年2月	<ul style="list-style-type: none"> イラク・クウェート関係が急速に悪化 イラク国境に新型ミサイル発射装置を配備（アメリカ、イスラエル等西側の緊張を高め、アメリカは艦船をペルシャ湾に配置） 	
2月19日	<ul style="list-style-type: none"> アラブ協力議会（ACC）開催（イラク、イエメン、ヨルダン、エジプト） フセインがアメリカを非難 イラクの債務免除と追加支出を強要 ムバラク大統領（エジプト）「私は強奪の片棒をかつぐ気はない。」と激怒 	これによって、イラクの関心が湾岸よりもアラブ世界の肥沃な三日月地帯に向かおうという理由からACCを認める。
3月9日	<ul style="list-style-type: none"> イギリス人記者バズフト処刑により、世界の目をむけさせる。 	
22日	<ul style="list-style-type: none"> イスラエルの諜報機関がブルを殺したと報道（ブルはイラクのスーパーガン開発計画の中心人物） 	
4月2日	<ul style="list-style-type: none"> フセイン演説「イラクは科学兵器を持っている。もし、イスラエルが何かしかけてきたら、神に誓って、イスラエルの領土の半分を焼き払ってやる。」 	
4月中旬	<ul style="list-style-type: none"> イランと具体的な和平交渉 	
5月下旬	<ul style="list-style-type: none"> アラブリーダーサミット（バグダッドにて）パレスチナ問題を取り上げイスラエルを非難 	
6月末	<ul style="list-style-type: none"> イラク高官ハマディー湾岸歴訪 表向きは原油価格引き上げのためにであるが非公式には各国に100億ドルずつイラク援助費の拠出を要求する。 	100億ドルは出せない。3年間で5億ドルなら拠出する。
7月10日	<ul style="list-style-type: none"> 湾岸諸国各石油大臣によるイラク要求に対する会議 原油価格引き上げと産油量規制 	クウェート及びアラブ首長国連邦、産油量厳守に同意
17日	<ul style="list-style-type: none"> フセイン演説（国民向け）「クウェート、アラブ首長国連邦が確約したにもかかわらず、いまだに原油を増産しているのは許せない。もし、言葉でだめなら、行動に訴えるしかない。」 	動揺しはじめる。
22日	<ul style="list-style-type: none"> フセイン・ムバラク会談でクウェートに侵攻しないと確約する。 	
25日	<ul style="list-style-type: none"> フセイン・米大使会談 	
26日	<ul style="list-style-type: none"> OPEC開催 	産油量を減産し、価格を上げることに同意
30日	<ul style="list-style-type: none"> CIA報告 イラクの兵力10万人、戦車300台、国境近くにて配備完了 	
31日	<ul style="list-style-type: none"> ジェッダ会合（サウジの斡旋） イラク側、石油探掘権プラス100億ドル要求 	皇太子兼首相サアド参加「これは交渉ではない。命令だ。」
8月1日	<ul style="list-style-type: none"> 会合できず 数日中にバグダッドで話し合いを続けることを両者同意する。 	用意した回答「イラクの債務を免除し、ペルシャ湾内の一小島をリリースする。」

年表ーイラクによるクウェート侵攻と湾岸戦争の終結まで②ー (神戸新聞から)

時 期	イ ラ ク を 中 心 と し た 動 き
1990年 8月2日	イラク軍がクウェート侵攻 国連安保理が即時無条件撤退を決議
1991年 1月9日	ジュネーブで米イラク外相会談物別れ
16日	午後2時、国連が定めたイラク軍のクウェートを撤退期限
17日	多国籍軍がイラク、クウェートを空爆、戦争に突入
18日	イラクがイスラエル、サウジアラビアへのミサイル攻撃を開始
26日	イラクが原油流出を始めたと米軍筋
30日	サウジの国境の町カフジで、イラク軍と米軍など多国籍軍が衝突 初めての地上戦
2月4日	米戦艦ミズーリがクウェートに向け艦砲射撃を開始 ラフサンジャニ・イラン大統領が湾岸戦争の和平仲介の意向を示す。
9日	チェイニー米国防長官とパウエル統合参謀本部議長が戦況分析のためサウジ入り
12日	フセイン・イラク大統領がプリマコフ・ソ連大統領特使との会談で「平和解決のため 協力する用意がある。」と言明 多国籍の空爆を妨害するため、イラクが油田施設50ヶ所に放火、と米軍筋
13日	バグダットの防空壕が多国籍軍の空爆を受け大勢の市民が負傷 米軍は軍事施設と主張
15日	イラク、条件付きクウェート撤退を表明 米国は新味なしと戦闘継続へ
18日	ゴルバチョフ・ソ連大統領がアジズ、イラク外相との会談で新提案
22日	イラクとソ連が撤退表明で合意 米国がイラクとソ連の合意を拒否 イラクに対し24日午前2時までにクウェート無条件撤退開始を要求
24日	午前10時(日本時間)地上戦に突入
26日	午前7時35分(日本時間)フセイン大統領クウェート撤退命令

<市民とともに考える「芦屋の戦争」展展示資料一覧>

(1991.7.26~8.15)

1. 市民からの提供資料一覧表

資 料 名	数 量	備 考
陸軍外出用帽子	1 点	日よけ付き
奉公袋	1 袋	
ガス燈の一部	1 点	
軍国カルタ	一式	4 9 枚
海軍運動帽	1 点	
報国の鐘	1 点	丹波焼か？
相撲少年組優勝旗	1 旗	兵庫県産業報国会
ハチマキ	1 本	大日本軍艦鞍馬
〃	1 本	神鷲隊芙蓉軍渡邊少尉
貯金箱	1 点	
手榴弾	1 点	
会員章	1 点	愛国婦人会
西淀川区教育会の賞	1 点	昭和16年3月
記章	2 点	
支那事变記念メダル	1 点	昭和12年
はいのう 背囊	1 点	

資料名	数量	備考
水筒	1点	
ベルト	1点	
扇子	1点	極天護皇基 陸軍大臣東條英機
航法計算盤	1点	
御食料品袋	1袋	
報皇貯金通帳	1冊	
修養日誌	1冊	
軍隊手帳	1冊	
貴重品袋	1袋	
新聞	一式	昭和20年8・9月 57部
はがき	26枚	昭和19・20年ほか
収納箱	1点	
カバン	1点	小型 ショルダー
軍靴	1足	
砲弾の一部	1点	以上57点 辻本勇氏
イラク人質下の書類	一式	
鉄兜	1点	
飯盒	1点	以上3点 藤原須美子氏

資料名	数量	備考
船用のランプ	1点	運輸省428型式承認 昭和3年4月製造
軍隊用ラッパ	1点	
陸軍用指揮刀	1点	
大日本帝国村田銃	1点	
木づち	1点	浴衣のノリおとし用
「号外」新聞を知らせるベル	1点	毎日新聞社
扇風機	1点	
扇風機の台	1点	
懐中電灯	1点	
水汲み用ツルベ	1式	4点
蔵用のカギ	1点	以上14点 石戸八二氏
生存の沈黙	1冊	有馬頼義 著
呪われた阿波丸	1冊	千早正隆 著
封筒（昭和23年使用分）	1通	戦後の紙不足により広告用紙 を代用したもの
		以上3点 匿名希望
満州事変記念絵葉書 ほか	10点	
暗幕	1点	
国民服上下	1点	

資料名	数量	備考
衣料品	1点	
ゲートル	1点	
リュック	1点	
雑のう	1点	
水筒	1点	以上17点 匿名希望
イラクのシェルター遺留品	11点	
ペルシャ湾に流出したオイルボール	3点	
ペルシャ湾の海水	1点	
イラクの子供たちの描いた絵	10点	以上25点 PAN
日本軍が中国へ侵攻したときに貼ったビラ	2点	
呉松区要塞にあった国民革命軍の書類	4点	
名誉門標謹呈のはがき	1点	以上7点 桜井宏氏
弁当箱	1点	川西のマーク入り
水筒	1点	以上2点 小田多祢子氏
訓練用の木製銃	1点	
報告帽 (鉄兜)	1点	
弁当箱	1点	
国防婦人会副組長委嘱状	1点	以上4点 藤川祐作氏

資 料 名	数 量	備 考
平和マラソンのタスキ	1 点	
ハチマキ	1 点	
Tシャツ	1 点	以上 3 点 三木政憲氏
さんとす丸テレホンカード	1 点	光森舜一氏(西鶴山八州会)
軍靴(下士官・兵用の短靴)	1 点	立石正夫氏

2. 戦争に徴用された船たち一覧表 (提供 佐藤明雄氏)

番号	船名	備考
1	鎌倉丸 (貨客)	日本郵船 17,498 t 1930 ディーゼル 20.7 ノット
2	浅間丸 (貨客)	日本郵船 16,955 t 1929 ディーゼル 20.7 ノット
3	新田丸 (貨客)	日本郵船 17,149 t 1940 タービン 22.5 ノット
4	樫原丸 (貨客)	日本郵船 27,700 t タービン 24 ノット
5	大洋丸 (貨客)	日本郵船 14,458 t 1911 レジプロ 16.6 ノット
6	箱根丸 (貨客)	日本郵船 10,423 t 1921 タービン 16.1 ノット
7	諏訪丸 (貨客)	日本郵船 11,758 t 1914 レジプロ 16.5 ノット
8	阿波丸 (貨客)	日本郵船 11,249 t 1943 ディーゼル 20.8 ノット
9	大和丸 (貨客)	近海郵船 9,655 t 1915 レジプロ 17.2 ノット
10	吉野丸	近海郵船 8,990 t 1906 レジプロ 17 ノット
11	ぶら志る丸 (貨客)	大阪商船 12,752 t 1939 ディーゼル 21.4 ノット
12	ぶえのすあいれす丸 (貨客)	大阪商船 9,626 t 1929 ディーゼル 16.6 ノット
13	^{ほうらい} 蓬萊丸 (貨客)	大阪商船 9,192 t 1913 レジプロ 16.8 ノット
14	高千穂丸 (貨客)	大阪商船 8,154 t 1934 タービン 19.2 ノット
15	瑞穂丸 (貨客)	大阪商船 8,511 t 1911 レジプロ 16.5 ノット
16	黒龍丸 (貨客)	大阪商船 7,369 t 1937 タービン 18.4 ノット
17	高砂丸 (貨客)	大阪商船 9,347 t 1937 タービン 20.2 ノット
18	崑崙丸 (貨客)	

3. 大久保一郎氏（故人）の戦時徴用船遭難画の写真

番号	タイトル	サイズ 縦×横 c m
1	船と運命を共にした「ぶら志`る丸」の大野船長	45.7×56.0
2	雷撃により棒立ちとなって沈没する「ぶら志`る丸」	45.7×56.0
3	船尾を上げて沈みゆく「関西丸」	35.6×43.2
4	雷撃により火柱を上げる「浅間丸」	45.7×56.0
5	船尾付近に被爆した「ぶえのすあいれす丸」	45.7×56.0
6	空襲により炎上する「ぼるねお丸」	35.6×43.2
7	沈没寸前に日の丸を掲げる「瑞穂丸」	45.7×56.0
8	基隆港外にて被雷沈没する「高千穂丸」	45.7×56.0
9	電撃により火柱を上げる「慶興丸」	35.6×43.2
10	日本郵船の「富士丸」を救助する「鴨緑丸」乗組員	35.6×43.2
11	猛火に包まれたブリッジ	45.7×56.0
12	ガダルカナル島にて空爆を受け炎上する「九州丸」	35.6×43.2

4. 市の戦争関係展示物一覧表

資料名	数量	備考
(パネル写真)		
阪神大水害	1点	撮影 昭和13年
漢口陥落の旗行列	1点	〃 昭和13年
市政施行祝賀の旗行列	1点	〃 昭和15年11月
防空演習	1点	東芦屋町
青年学校	1点	
国防婦人会の活動	2点	
戦時体制下の学校	2点	以上9点 公聴広報課所蔵
(防空壕出土品)		
大日本ビール瓶	1本	
キリン	1本	
シャンペンの瓶	1本	
パイロットインキ瓶 (万年筆用)	1点	
ガラス瓶	2点	
化粧品 瓶	4本	資生堂・ナリスなど
飯茶碗の一部	3点	
皿の一部	3点	
屋根瓦	2点	

資料名	数量	備考
湯のみ茶碗の一部	2点	以上20点 文化財係所蔵
(図書, ビデオ関係)		
News week	26冊	湾岸戦争の報道
湾岸戦争日本はどうなる	1冊	瀬木太郎 著
湾岸戦争と海外派兵	1冊	剣持・宮嶋・山川 編著
湾岸戦争と日本	1冊	朝日新聞「湾岸戦争」取材班
中東湾岸戦争と日本	1冊	板垣雄三 編
フセイン流戦略の深層	1冊	佐々木良昭 著
フセイン 布施員をはめた醜手 ^{ブッシュ}	1冊	吉村作治 著
世紀末の中東を読む	1冊	高木規矩郎 著
憎しみの大地	1冊	落合信彦 著
たったひとりの闘争	1冊	アントニオ猪木 著
「聖地」荒れて	1冊	落合信彦 著
分析 湾岸危機	1冊	小山茂樹 編
昭和の記録	8本	ビデオ
湾岸戦争の全貌 ／作戦「砂漠の嵐」	1本	ビデオ
		以上46点 図書館所蔵
焼夷弾	1点	松木義昭氏 寄贈分
焼夷弾の底蓋	1点	室崎義夫氏 寄贈分

資料名	数量	備考
軍用雨ガッパ	1点	五味富治氏 寄贈分
米軍のタクティカルミッション	1点	パネル写真
芦屋霊園戦争関係碑写真	4点	
日本の中国東北地方侵略	31点	パネル写真28点, 地図等 3点
防空壕の様子	2点	写真
防空壕解説図・所在地図	3点	
米軍資料にみる姫路空襲	1冊	佐々木和子 著
潮岬地区への艦砲射撃について	1冊	〃
住友金属桜島工場への爆撃について	1冊	〃
西宮, 芦屋, 御影地区への爆撃について	1冊	〃
大阪陸軍造廠への爆撃について	1冊	〃
まだ見ぬ肉親を求めて	2冊	中国残留孤児名簿
全国戦災史実調査報告書	1冊	平成2年度日本戦災 遺族会
画集戦時徴用船の最期	2冊	大久保一郎氏 画集
英語のテキスト 市松人形	2冊	
広報「あしや」8月号特集記事	2点	平成元年, 平成3年

「平和・愛・人権」のつどい 91
市民とともに考える「芦屋の戦争」展解説

発行日 1991年7月26日

解説発行 芦屋市同和対策部啓発担当課
〒659 芦屋市精道町7-6
☎0797-38-2055

印刷 文書行政課浄書印刷係

第5回 市民と考える戦争展資料

芦屋への空襲記録

—— 焼夷弾・爆弾の中を逃げまどった市民の声と
アメリカ軍戦術作戦任務報告書から見る ——

芦屋市・芦屋市教育委員会



発刊にあたって

第二次世界大戦後の世界は、自由主義経済圏と共産圏をそれぞれ代表するアメリカとソ連を軸に展開され、しばしば対立してきました。「第三次世界大戦を想定してこれを熱戦（hot war）と呼ぶのに対して、戦争にまでいたらない対立という意味で冷戦と呼ぶ」（「現代用語の基礎知識」から）冷戦構造（東西問題）が続きます。しかし、東西ドイツ統一に代表される民主化の波をはじめ様々な要因は、この東西問題を解体させました。

一方、第二次世界大戦後、南半球に主として位置するアジア、アフリカ、ラテンアメリカの国々が独立しました。この国々と、主として北半球に位置する先進工業国の繁栄との経済格差が、1960年ごろから問題となりはじめます。これが冷戦構造の東西問題に対し、南北問題と呼ばれるものです。

1980年代以降、北の先進工業国と南の発展途上国間の経済格差は、一段と拡大します。そして、冷戦構造が解体した現在、南北問題を中心に新しい国際ルールをどう構築していくかが重要な課題となってきました。

今年6月3日から12日間、ブラジルのリオデジャネイロで国連環境開発会議（地球サミット）が開催されました。地球規模の環境問題とは、南北問題そのものという意見も聞きます。日本はこの会議で、世界が今大きな転換点であるとの認識から、新しい国際秩序として「地球市民時代」の構築を目指すことを提言しました。

私たちが地球へ優しくすることは、将来の世代の生存とかかわることです。それは、水や空気、土壌、森林などを守るだけでなく、核拡散の動きや民族紛争・局地戦争・貧困・乱開発・公害等による環境破壊など様々な問題と関係があるといわれています。

第5回市民と考える戦争展を開催する機会に、これからの地球に最も大切な「環境・平和・人権」に対し、これまで最も大きな影響を与えてきた戦争のことを、私たちのまちが体験した空襲を通して考えていただけたらと、この冊子を作成しました。

焼夷弾・爆弾の中で逃げまどった市民の声と、アメリカ軍戦術作戦任務報告書の両面、即ち攻撃された側の状況と攻撃した側の評価を重ねることで、改めて戦争の非情さと環境破壊が浮かび上がるのではないかと考えたからです。

最後にこの冊子は、神戸新聞社及び市内在住の佐々木和子氏の協力を得て、市民の皆様にお届けすることができました。御協力に対し、改めてお礼申し上げます。と同時に、戦争を再び繰り返さないための資料となれば、望外の喜びであります。

1992年（平成4年）7月

芦屋市・芦屋市教育委員会

目 次

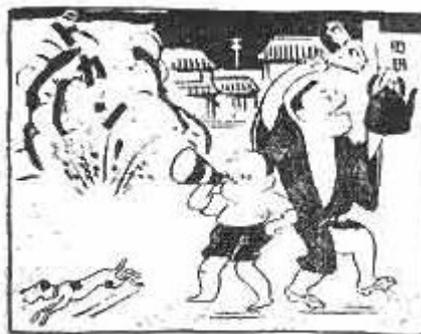
【焼夷弾・爆弾の中を逃げまどった市民の声】

1945年（昭和20年）5月11日，芦屋に初空襲 …	4
8人の子どもが窒息死 ……………	5
6月5日，第2回目の空襲 ……………	6
まず香櫨園から… ……………	7
松林で親子が… ……………	7
芦屋中学が消失 ……………	8
8月5日芦屋炎上 ……………	10
遅れた空襲警報 ……………	10
「先生，僕の家は」 ……………	11
爆夷弾の嵐 ……………	12
銀色のタツ巻き ……………	13
戦争が人間を変えた ……………	14
突然，怪音が… ……………	15
だれも知らぬ顔 ……………	15

【西宮，芦屋，御影地区への爆撃について】

はじめに ……………	18
目標についてのアメリカ軍の情報 ……………	19
8月6日の爆撃 ……………	21
その他の爆撃 ……………	23
おわりに ……………	25

焼夷弾・爆弾の中を逃げまどった市民の声



「焼夷弾落下せば」（防空心得 冊子から）

<1945年（昭和20年）5月11日，芦屋に初空襲>

川西航空機甲南製作所を主目標に，5月11日来襲したB29は，西宮市を初空襲，神戸市東部に大きな被害を与えただけでなく，住宅都市・芦屋にも初のツメ跡を残した。

甲南製作所を壊滅したB29の編隊の一部は，右前方に芦屋川を見ながら，北上し，同市の西南部から北東へ抜けるコースをとった。

このコースには「芦屋を初空襲したのは神戸の山沿いに西から東へ爆撃してきた編隊だ」（井田健治郎さんの話）という説もある。

この朝，丸尾和枝さん（当時30歳）は空襲警報発令と同時に“ゴー”という爆音を聞いた。2階にかけ上り，ガラス戸にへばりついた。B29の編隊が南空から向かってくる。ビリリ，ビリリ…ガラス戸が不気味に震えた。

階下には警戒警報で山手国民学校から帰っていた栄子さん（10歳）元則君（7歳）の2人と，二男信広ちゃん（4歳），かわいい盛りの悦子ちゃん（2歳）と4人の子どもたちが顔をそろえていた。

ドッドドー，ドッドドー。

南の空に爆雲が上がる。そのたびに地鳴りが走り，家は“ぐらっ，ぐらっ”と揺れた。夫の栄さん（当時39歳）は，徴用先の尼崎の工場に出ていて留守。

「栄子，元則……」

子どもたちの名前を呼び，下へかけおけると，おびえる4人を引き寄せ，フロンをすっぽりかぶせた。

「奥さん，奥さん，あぶない！早く，うちの防空壕へ」

東隣の岩田春子さん（当時38歳）のせきたてる声。

和枝さんは悦子ちゃんを抱き，3人の子どもを押しやるように，岩田さんの裏庭にある防空壕へ逃げ込んだ。

「退避ー。退避しろ！」

と警防団員が叫びながら，道を駆け抜ける。B29はもう目前。そこへ岩田さんが，4人の子どもの手を引き，駆け込んできた。

「裏の池田さんところがお留守なの。美智子ちゃん（当時7歳）とソノちゃん（当時6歳）が泣いていたので連れてきたわ。うちの祥子（当時10歳）と英紀（当時6歳）も一緒にお願ひ。順子（当時8歳）が遊びに出たままなので，

私、さがしてくるから」

もどかしげに言い残して、岩田さんは再び外へ。

和枝さんがいた防空壕は支柱も、ワクもない素掘りのまま。地盤の堅い神戸東部、芦屋、西宮の山手地区には、この種の素掘りの壕が多かった。

壕の広さはタタミ一畳ぐらい。8人の子どもたちを4人ずつ2列に、向き合ってすわらせた。暗闇がよけいに不安をつのらせる。

「みんな、こわくないよ。だいじょうぶ。じっとして…」

2歳の悦子ちゃんをひざの上に抱き、耳は、“土天井”を突き抜けてくる爆撃音を追った。

<8人の子どもが窒息死>

空襲警報のサイレンが鳴ってから5分後。

「ドカーン」

壕のわきに爆弾がさく裂。“バサッ”と壕の両壁が「く」の字形にくずれた。天井部分も陥没。体をひねったのか、気がつくのと、和枝さんは鼻の上だけが土の上に出ていた。空気は吸える。だが、吐けない。胸が圧迫され、鼻こうにも土がはいりこむ。全身が土の中にのめり込み、手も足も動かない。

そんな姿のまま、和枝さんはしっかりと、土中の悦子ちゃんを抱いていた。持ち上げることも、揺することもできない。ただ、ただ動かない手と足がのろわしかった。

「不思議と涙も出なかった。神経がボーっとなくなってしまって…」

と、和枝さんは、その瞬間を述懐する。

芦屋川の共同退避壕にいた岩田さん、池田たきさん（当時35歳）と警防団員5、6人がかけつけたのは、5分ほどたってからだった。救出作業が始まった。だれも声1つたてない。惨状は、この壕だけではなかった。

スコップで1人、また1人、子どもたちが掘り出される。土にはまみれているが、体は無傷。ぬくもりがある。団員の手で人口呼吸が始められた。

「祥子、英紀」

「美智子、ソノ…」

答えは返らなかった。

丸尾栄子、悦子、元則、信弘、岩田祥子、英紀、池田美智子、ソノ……8人

の子どもたち全員が窒息死した。

「ものすごい爆撃でした。私の家に直撃弾が落ち、周辺の家はもちろん、ひとかかえもある松が吹っ飛んでいた。残った木には衣類がひっかかって……」

こう話す池田さんは、

「掘り出された美智子とソノを見たとき、欲目でもわが子だけは生きてほしい。なんとしても生かせたいと思った。」とつけ加えた。

同日夜、西山町の安楽寺で爆死者たちのお通夜が営まれた。この8人を含めて、子どもの死者は15人にのぼった。

“通り魔”のような、この日の爆撃で、芦屋市内の死者は39人重軽傷16人、罹災者962人、全半壊175を数えた。

<6月5日、芦屋への第2回目の空襲>

神戸市内に3,200人もの死者を出した6月5日朝の大空襲は、阪神間（芦屋、西宮）にも5月11日に続く2度目の災害をもたらした。

前日までの状況

6月4日、はるか7～8,000mの上空にB29が1機、銀翼を光らせて、ちょうどわが芦中の上空を東方へ過ぎ去るのを見送った。（県立芦屋高校15年史から）

県立芦屋中学（現在の県立芦屋高校）は、南宮町、現在の精道中学の場所にあった。同校には川西航空機の学校工場（板金）があり「いつかは、やられる」と生徒も教職員も覚悟していた。



国防婦人会の活動状況

<まず香櫨園から>

この日早朝、平田町に住んでいた同中学2年岩崎稜さん（当時13歳）は校庭西南の防空壕前に学校防衛隊（市内徒歩通学の2年生で組織）3～40人と陣取り、空をにらんでいた。

午前6時の空襲警報からもう10分はたっていた。いらいらするような不気味な退屈感が続く。空に機影も音もないまま、緊張感がゆるみかけたとき、西空にB29の編隊が浮かび出た。編隊は神戸市東灘区深江のあたりで焼夷弾を投下。真っ黒な油煙が、五月晴れの空に吹き上がる。と、編隊は遠く西北の空で弧を描き、東へ消えた。

間もなく別の編隊が、真っ直ぐ深江上空から向かってきた。9機だ。各機の胴体中央が黒く筋を引いた。

「爆弾倉を開いたな」

岩崎さんはとっさに鉄カブトをかぶった。爆弾倉がピカリと光る。落ちてくるケン粒のような黒点。それがパッと散った。親子焼夷弾らしい。次の瞬間、青い筋が中空にひらめき、夕立のような落下音が遠く尾を引き、東の空へ走った。

「このときは、まだみんな余裕があってネ。というのは落下し始めたのが頭上でしょう。これは西宮、香櫨園行きだとみくびり、壕にはいる者はいませんでしたよ」

ホッとした芦屋中学防衛隊に向かって、三たびB29の編隊が銀翼を光らせ、先刻と同じコースで急襲してきた。反射的に東の空を振り返った岩崎さんは、香櫨園一带に黒煙が上がるのを見た。

<松林で親子が…>

近づく爆音。やはり9機いる。頭上から西へ30度、仰ぎ見ると約60度のところで再び爆弾倉がピカリ。「ザー」というウナリとともに黒点が鋭く突っこんでくる。

全員が壕へ逃げ込んだ。

ザッザー、バシバシズシーン。

音がやんで外に出た。校庭は油煙におおわれ、1m四方に1本の割りで焼夷弾が突き刺さり、猛火を噴出していた。

木造2階建て「コの字形」の学校は東校舎から炎上。そこには昭和19年暮れ、川西航空機の板金工場が1、2階の教室をぶち抜いてつくられていた。中央校舎にも飛び火。物象（物理・天体・気象などを対象とした教科）教室のヒサシ部分が燃え始めた。

全員が壕を出て逃げる。岩崎さんも跡を追った。途中で鉄カブトを壕の中に忘れたのに気づきとって返した。学校西側の民家は無事。東側は田んぼと野原。校庭の南側には建ったばかりの学校校舎をはさみ、川崎製鉄朝鮮人寮が延焼中であった。

「その時、何を思ったか鉄カブトに水をくみ、物象教室のチョロ火を消しましてネ。あとはともかく、一つ消して役目は終わったと海岸へ一目散でした」

岩崎さんは朝鮮人寮の横を抜け、海岸へ出る途中、西側に松林があった。ここでは南宮町28の長屋（2棟8軒）の人たちが、フトンにくるまり爆死していた。島原なるゑさん（当時41歳）の妹大山三四子さんもその犠牲者の一人。

南宮町あたり的人是みんな山手へ逃げたのに、あの長屋だけ防空壕もない松林へ行ったんです。三四子さんは子どもと母親の三人連れ。2人をかばうように、額に小指ほどの穴をあけて死んでました。ここで10人前後が死傷したと聞いています」と島原さん。

六月五日（火）曇 午前6時半敵編隊空襲、多数ノ焼夷弾ハ少数ノ小型爆弾ト共ニ殆ンド全校舎ニ落下命中シ約三十分ニシテ全焼セリ、消防隊ノ活動モ及バズ。

（芦屋中学校日誌から）

<芦屋中学が消失>

「芦屋中学が燃え出した」と同校教頭の河野豊治さん（当時44歳）は緑ヶ丘町の自宅防空壕で聞き、学校へかけつけた。

すでに東校舎、中央校舎は焼け落ち、西端の教室を残すのみだった。このころ、岩崎さんら学校防衛隊員も続々帰校した。

火の手をかいくぐり、みんな果敢に机や書類を運び出す。1階2年1組の机持ち出しにかかっている間に2階が火に包まれた。西端2階、音楽教室のピアノはもうダメ。1階廊下にあったグライダーを数人がかりでかろうじて外に出すと間もなく、全校舎が焼け落ちた。

午前八時半、焼跡校庭ニ全生徒及ビー・二年主任集合、教頭ヨリ訓話ヲナス。尚、小型爆弾及び不発焼夷弾ノ周囲ニ縄又ハ囲ヒヲシ、コレニ近ヅクコトヲ禁ズ。

(同校日誌から)

その夜、焼け跡警備のため教職員、生徒で不寝番が置かれたが、残り火のためか燃え尽きたはずの焼け跡全体がほの赤く浮かび上がった。空襲で直接の死傷者は出なかったものの、焼夷弾を不用意に取り扱った生徒2人が、右手首を失うなど重傷を負った。

5日の空襲は、市内の浜手地区に初の被害をもたらした。小型爆弾にまじり、初めて焼夷弾が落とされた。

芦屋中学は南側の川崎の寮とともに空から見れば一大軍需工場に見えたらしく、同中学への投下弾の命中率は高かった。このため民家への被害は少なく、阪神電鉄以南夙川両岸の1, 200戸をなめつくした目と鼻の先の西宮市空襲の影響もほとんど受けなかった。ただ焼失戸数が少ない割には川崎寮の被災を含め罹災者は800人を超えた。

打出警防団員をしていた大西豊蔵さん(当時45歳)は「私の記憶では、死者は20人近くを数えたと思うんですがネ。松林で爆死した長屋の人たちは、同中学の北側旧国道筋(現在の国道43号線)にあった妙福寺に安置、山手の市営焼却場に送りました」と話している。

投下焼夷弾千二百個、小型爆弾十五個。死者十一人。重傷五人、全焼十一、罹災者八百十二人。(芦屋市史から)



校舎を背にグライダーの滑空訓練をする芦屋中学生たち。このグライダーも空襲の難はのがれたが、終戦後、占領軍への遠慮から焼き捨てた(県立芦屋高校十五年史から)

<8月5日芦屋炎上>

大阪湾上に照明弾がいくつも炸裂した。8月5日深夜、阪神間の市街地が、真昼のように照らし出された。

東六甲山系の中腹、神戸営林署剣谷森林気象観測所の望楼から、人呼んで、“人間灯台”の池野良之助さん（当時35歳）は、この光景を、目の下に見ていた。照明弾が消えると、芦屋の市街地に、赤い点が一つ二つ。どんどんそれがふえ、浜手は大きな炎となって揺らぎ始めた。

「午後十一時半ごろでしたか解除になった警戒警報が再び出て、望楼から下を見ると、芦屋はもう燃えてました。西宮の火の手はまだ見えなかったです」
これとほぼ同じころ。

芦屋市役所で宿直していた教育課主事佐藤良則さん（当時34歳）は「ドドン」と南西側から聞こえてきた爆撃音に飛び起きた。警戒でかけっ放しのラジオは無音のまま。空襲だ。ハダシで宿直室を走り出て警防課へ飛び込み、空襲サイレンにスイッチをいれた。

<遅れた空襲警報>

「ブー、ブー、ブー」

いらだつように、断続音が空へ吸われていく。だが、その時には各所で火災が起きていた。市役所東側の精道国民学校（当時は食糧営団大豆倉庫）の2階建て木造校舎も炎上し始めた。同校の児童は岡山県へ疎開中。この日は女の先生2人が宿直していた。その一人、古川英子先生（当時42歳）は、

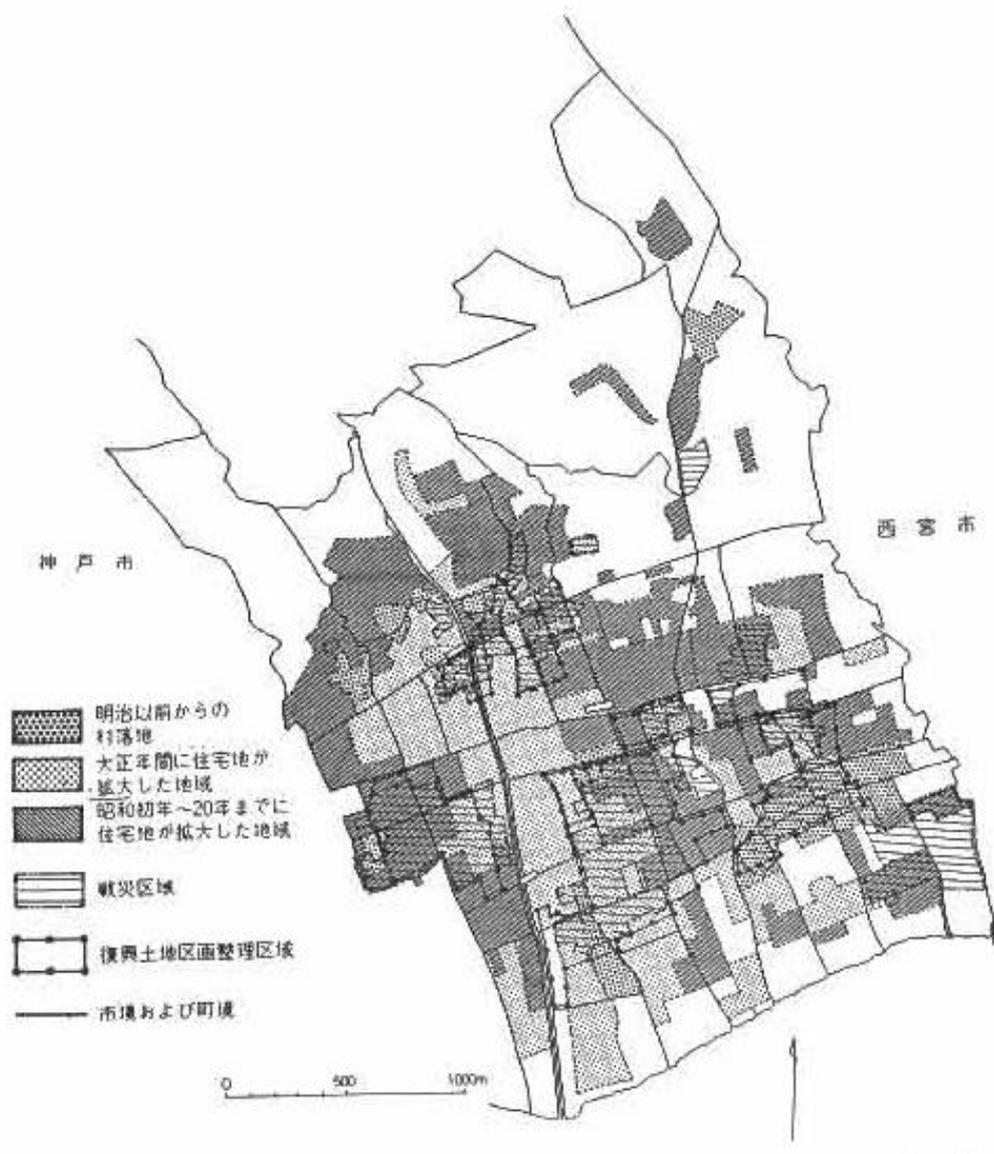
「宿直室の西窓を見ると、真っ赤でした。勅語をかかえ、池の水にひたした毛布をかぶって校内の防空壕に逃げ込んだものの、空襲はひどくなるばかりです。女2人では手のほどこしようもないまま、校舎は中央部から燃え始めました。たまらず壕を出て市役所横の壕まで逃げました」

焼夷弾にまじって爆弾も落ちた。精道校から北東の三八通り、甲陽市場一带はたちまち火の海となった。同校から東300mの宮川国民学校（現在の県立芦屋高校の場所）も焼失。児童たちはこのニュースを岡山県の疎開先で聞いた。

<「先生、僕の家は」>

8月6日、神戸東部、西宮空襲をラジオが報じる。子どもらには知らせまいとの岸本、伊勢田両君の意見に従う。でも子どもの我々の顔色を見るのは早い。「先生、何かあったの」「僕の家は」やつぎばやに聞き漁る。午後4時ついに第一番にかけつけた津知の永井俊夫氏によって一切の状況が判明する。暗然として声なし。見れば子どもらとその悲しみを直接聞くを避け観音堂の周囲に不安なまなざしを向けて取り巻く。

(精道国民学校、松島正之助先生疎開日記から)



<焼夷弾の嵐>

寝入りばなの不意打ちで、かつてない夜間空襲となった。火タタキ、バケツリレーの消火体制は、何の役にも立たなかった。芦屋市警防団精道分団の消火班長小田浅治郎さん（当時37歳）は浜芦屋町から、とるものもとりあえず芦屋海岸へ逃げた。だれいうとなく「空襲には水ぎわが安全」という考え方が流れていたため、浜辺は避難してきた人がひしめいていた。

バシャ、バシャ、バシャーと、焼夷弾が海面にも突っ込んでくる。B29は幸い浜辺を飛び越し市街地へ。爆音が通過するたび北側に見える火の手は大きくふくらんでいった。

このときの旧国道筋以南の被害は大きく、小田さんの記憶だけでも「精道分団長の山村義一さんが焼夷弾の直撃で即死、竹園町のソロバン塾の一家5人が壕の中で全員死亡。とにかく消火活動どころじゃなかった」という。このほか芦屋市戦災死没者遺族会の調べだけでも浜町で5人の死亡が確認されている。

一方、食糧営団芦屋米穀出張所配給主任の中島富蔵さん（当時44歳）は芦屋川の西、清水町の自宅から炊き出し準備のため空襲の中を、芦屋署へ向かっていた。同署西へ通じる芦屋川の公光橋は燃えていて渡れず、右岸沿に北から大回り。阪神国道（現在の国道2号線）をつなぐ業平橋下には避難してきた大勢の人が身を寄せ合い、公会堂（現在の市民センター）の屋根は焼夷弾で赤い“舌”を出していた。川沿いの老松も、パチパチはじけて燃えていた。

中島さんは、やっとの思いで左岸を南下、芦屋署地下室へかけつけたが、混乱で炊き出しどころではなかった。



防毒用マスクをつけて防空演習（芦屋公園）

<銀色のタツ巻き>

その時、業平橋の下にいた小西友さん（当時14歳）は燃え上がる芦屋の印象を「煙が銀色に渦巻き、竜状に巻き上がって家が燃えているんですね。塗りつぶした真っ黒な夜に浮かび上がる赤い炎のコントラストの中へ、公光橋が透き通るように真っ赤な色で橋全体を浮かび上がらせ、真ん中から焼け落ちていきました」と話している。

B29は市街地を南西から北東へかけて空襲していった。阪神電鉄芦屋駅、同打出駅、国鉄芦屋駅（現在のJR芦屋駅）周辺を軒並み焼き払い、市内北東部にポツンと残る岩園国民学校（当時川西航空機甲南製作所倉庫、海軍部隊駐屯）も爆撃目標に置いていた。

20年8月5日、市は大空襲を受けて多くの犠牲者を出し、その大半は灰燼（かいじん）に帰した。なかでも、校園の被災は特に著しく精道国民学校は鉄筋校舎を除き、宮川国民学校は鉄筋校舎（大破）を残してそれぞれ大部分を焼失、岩園国民学校は全焼しわずかに山手国民学校のみが、その姿を残すという惨状であった。…各学校園併設の幼稚園は20年4月から休園していたが、これも山手幼稚園を除きすべて焼失（宮川は一部）している。

（芦屋市教育委員会20周年記念誌）

駐屯中の海軍将校から「空襲だ！」とたたき起こされた浅野先生(当時27歳)は宿直室から校庭に飛び出した。浜手、精道国民学校あたりに火の手が上がっている。真上に“ブルンブルン”とB29特有のプロペラ音。と、次の瞬間“バーン”という爆発音とともに木造校舎のモルタルがはぎ取られ、下の板張りが全部見えたように思えた。呼吸を合わせたかのように観音開きの校舎の戸が爆風であき、高く一鳴り。

「それからは重要書類の運び出しを攻撃の合間にしたり…。校舎東の防空壕は海軍の兵隊さん4～50人で満員。はいりきれず立ちつくすうち、校舎北西側倉庫からの飛び火で木造2階建て校舎は焼け落ちてしまいました」

<戦争が人間を変えた>

8月6日未明の阪神大空襲は、夜明けとともに、無残な傷跡をあらわにしていった。

寺東金二さんは、妻の義妹で宮川町（現在の県立芦屋高校プール西北側）に住んでいる金見光子さん宅の焼け跡に呆然と立たずんだ。

「金見の家は主人が出征中、私の家に良く行き来してましてネ。6日夜、大柘町の私の家は焼けましたが全員無事。空襲がおさまり、金見の家付近がやられたやられたと聞いてかけつけたら…」

柱一本残っていなかった。くすぶる煙を透かして見ても、光子さんたちはいない。「もしや防空壕に」と、裏庭の壕をのぞこうとした。だが、その回りは六角形の焼夷弾が突き刺さり燃え続けている。

バケツで水をかけ、のぞいた壕内に、光子さんが美恵ちゃん（当時1歳）を抱き、哲也君（当時3歳）、美抄子ちゃん（当時5歳）の二人と足を伸ばし、壁にもたれて死んでいた。

「窒息死でした。壕の外の焼夷弾で出るに出られなかったんです。みんなロウ人形みたいでネ。顔だけはオレンジ色に変わってしまいました。もうかわいそうで…」

他の隣保だったため寺東さんは4人の死体を運び出す手伝いを、その隣保長に頼んだが、「ご自分のところでしてほしい」という返事。

みると、近所の人たちが、焼け残った畑のナスやキュウリをわれがちに奪い合っていた。激怒した寺東さんは「あんたら、手伝ってくれんとそのザマは何や!」と思わず叫んでしまった。だれが悪いのでもない。戦争が人間を変えた。無性に腹立たしく、悲しい思い出だ。

6日の空襲後間もなく、ニューギニア戦線にいた光子さんの夫の金見清春さん（当時28歳）戦死の公電が寺東さんへ届いた。終戦まであと数日、金見一家は全滅した。



防空演習を知らせるチラシ

<突然、怪音が…>

「警報解除」に中村あさ子さん（当時30歳）は、宮川のすぐ東、阪神電鉄北側ぞいの防空壕で、ホッと一息ついた。一緒にいた4人の子どもたちにはカスリ傷1つない。夫の巳之介さん（当時39歳）は、山手国民学校の防衛召集本部に向かった。

山手や西側は、火の手が夜空を焦がしていた。金児さんの家からあさ子さんのいる防空壕まで阪神沿いに東へ400m弱。そのとき、あさ子さんは、さっきまで焼夷弾の落下音が阪神のレールと共鳴“ヒュー、ヒュー”と不気味にうなった断続音を思い出し、首をすくめた。

「それから4人の子どもたちを夜明けまで壕内で寝かせるつもりでネ。幸い家は無事。私は逃げるとき外へ運んだ家財道具を整理しようと思って壕を出たんです。子どもがこわがらないように壕の戸口を締めてやりました。阪神北側沿いには壕が隣合わせにズラリとあって、ご近所の皆さんも出てきました」

壕から東へ100m、ガードを南にくぐり、若宮町の自宅付近まで来たときだった。頭上に、“ゴー”という怪音が迫ってきた。

その少し前、芦屋市役所上空付近を夜目にも白いパラシュートが降下しつつあった。

「空襲や、敵機がまた来たぞ、空襲、空襲」その声に道行く人たちはクモの子を散らすように再び壕へ。あさ子さんは足がふるえた。

「私、壕の中に子どもを置いてきた。どないしょう」立ち尽くすあさ子さん。

「そんなこと言うてたら、あんたが危ない。早く壕に入れ、そこの壕に」

近所の人たちが叫ぶ。瞬時に近づく爆発音。ババーンという大爆発があたりを響いた。子どもたちのいる方角だ。走る足に切断された電線がからみつく。壕の付近には飛行機の機体らしいものが散乱。壕はざっくりと押しつぶされていた。

<だれも知らぬ顔>

「子どもがやられてしもうたあ！子どもが、だれか助けて…」

あさ子さんの悲鳴が響いた。半狂乱になって、ガードと壕の間を何度も何度も往復した。

だれも手を差し延べてくれなかった。押し黙る各壕内の人たち。東の空はも

う白い。さまようあさ子さんに、外にいた男の人が「中村さん、あれ、友軍機が落ちてるんやで。翼に日の丸がついてる。敵機やない。」

「一生恩にきるから掘ってやって」と手を合わせたが「憲兵が立ち会わなければ」とニベもない。通りかかった芦屋署員もあさ子さんを無視した。絶望感と疲労にあさ子さんはガード下でがっくりヒザをついた。

急を聞きつけ巳之介さんと姉婿の岸田藤四郎（当時39歳）が戻ってきた。救出作業が始まった。やっと近所の人も手を貸してくれた。

やはり友軍機が落ちていた。目撃者の話と現場の状況を合わせると、山手上空で火ダルマになった機体が宮塚橋西の畑をそぎ取るように阪神北側の石がきに激突。胴体部分が子どもたちのいた壕を押しつぶし、翼は阪神南側の民家の二階を突き破り、約200m吹っ飛んだ。

くずれた壕内から由喜子ちゃん（当時11歳）、ひとみちゃん（当時3歳）、ひろみちゃん（当時10か月）の窒息死体が見つかり、2女の文子ちゃん（当時8歳）だけは奇跡的に助かった。

市役所上空のパラシュートは墜落機のものだった。操縦士は芦屋川右岸降りると、どこともなく姿を消したという。あさ子さんが軍関係者から聞いた話では「空襲偵察中、エンジンに故障を起こした」というのだ。軍からの見舞い金は当時のお金で50円だった。

8月6日

投下焼夷弾約千五百個。小型爆弾四十個。死亡八十九人、重軽傷百二十九人、行方不明二人。全焼二千七百三十二個、全壊十一個。罹災者一万六千三百七十九人。（芦屋市史から）

【以上は、1971年（昭和46年）8月10日から9月12日までの間、神戸新聞「阪神大空襲」の企画で29回にわたり連載された記事のうち、芦屋市に関係ある記事を抜粋】

【西宮，芦屋，御影地区への爆撃について】

ーアメリカ軍戦術作戦任務報告 (Tactical Mission Report) からー



戦術作戦 任務報告書

「戦術作戦任務報告 (Tactical Mission Report)」とは、グアムにあった第21爆撃機軍団 (1945年7月16日、第20航空軍に改編) の司令部が、爆撃を行うたびに作成した報告書である。

内容は、本文にあたる戦術説明、付録部分の作戦、気象、通信、情報、総合統計概要、戦闘命令、配布の7部門で構成。地図・写真・図表も適宜含まれ、攻撃側からの貴重な第一資料となっている

<はじめに>

太平洋戦争末期，1945年（昭和20年）8月6日未明，西宮，芦屋，御影を中心とする阪神地区は，アメリカ軍機による焼夷弾攻撃を受け，甚大な損害をこうむった。阪神大空襲といわれるのが，これである。

「西宮市史」「芦屋市史」「魚崎町誌」「本山村誌」によると，この他，西宮市は5月11日，6月5日，6月15日，7月24日に，鳴尾町（現在西宮市）は6月9日に，芦屋市は5月11日，6月5日，6月15日に，魚崎町，本山村（ともに現在神戸市）は5月11日，6月5日に爆撃を受けたという。

西宮，芦屋両市，御影地区（現在の神戸市東灘区，当時は武庫郡御影町，魚崎町，住吉村，本庄村，本山村）は，神戸，大阪の2大都市には含まれた住宅地域である。これらの地域への数回の爆撃は，どのようなものだったのだろうか。本稿では，8月6日におこなわれた西宮，芦屋，御影地区への焼夷弾攻撃を中心に，この地域への爆撃について，アメリカ軍の資料をもとに紹介する。

また，終戦後の11月から12月にかけて，大阪，神戸，京都の各都市地域の米国戦略爆撃調査団都市地域部門（Urban Area Division）の調査班のメンバーが，各都市の経済生活への爆撃の効果を調べるため訪れた。この調査結果は，47年（昭和22年）6月「大阪－神戸－京都に対する空襲の効果」（Effects of Attack on Osaka-Kobe-Kyoto）で報告された。これらの資料も，適宜利用した。資料の所在は，ワシントンの国立公文書館であり，大阪国際平和センターと関西大学図書館が入手した原文のマイクロフィルムを利用した。

本稿作成にあたり，いろいろ便宜をはかって下さった大阪国際平和センターと関西大学図書館に厚く御礼申し上げます。また，原文でグリニッジ時間，マリアナ時間が使われている箇所は，すべて日本時間に直していることをことわっておく。

<目標についてのアメリカ軍の情報>

8月6日の爆撃目標になった西宮、芦屋、御影地区は、西宮市、武庫郡鳴尾町、芦屋市、武庫郡御影町、魚崎町、住吉村、本庄村、本山村からなっていた。この地域について、アメリカ軍はどのように考えていたのだろうか。第20航空軍A-2（情報担当）部目標部門（Target Section ,A-2 ,Twentieth Air Force）による、7月21日付「目標についての情報（Target Information Sheet）」での分析をもとに略述すると次のようになる。

西宮－御影工業都市地域（Nishinomiya -Mikage Urban Industrial Area）は、御影から西宮のさきの武庫川までをしめ、人口をあわせて、約30万人である。人口がまばらなところが大部分であるが、重要区域では、1平方マイルあたり人口密度が3万人から5万人と密集していたという。そして、平均弾着点には、この人口密集地帯を指示されるだろうとしている。目標分析の視点から言えば、この地域は、神戸工業都市の拡大部分である。地域内には、何百という家内工業の工場（household industries）があるという。地域の西部には、川西航空機深江製作所（正しく甲南製作所、すでに破壊済み）があり、南東部には川西航空機鳴尾製作所（すでに破壊済み）に隣接して、西宮飛行場があるとのことである。重要性については、神戸－大阪にある大工場の下請け工場として、小さいけれど非常に重要な部品を生産する小工場が多数あったことをあげている。また、西宮は1930年から人口が約50%増加しており、その点もこの地域の重要性を示すものとしている。

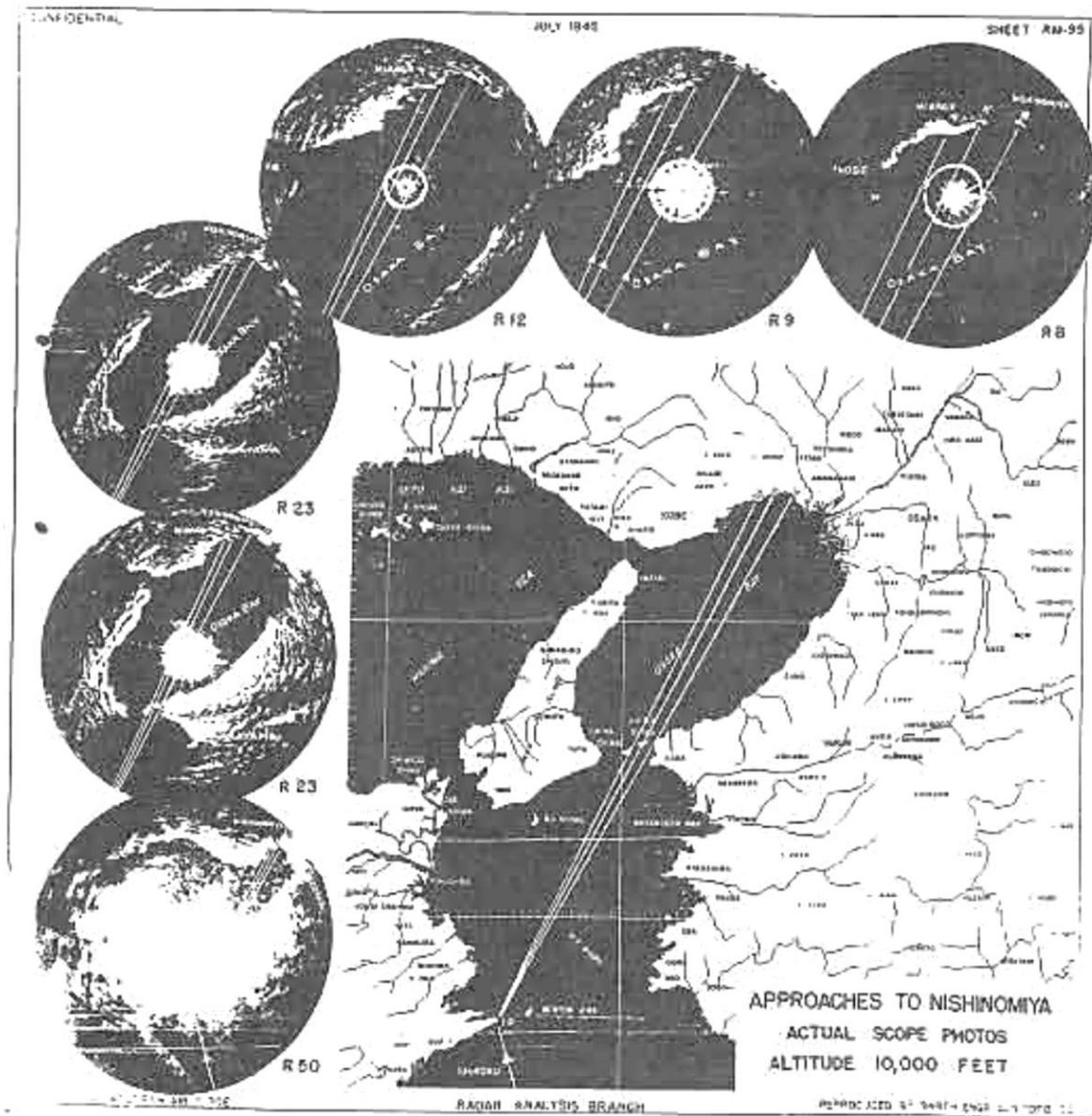
以上の分析の中で注目されることは、西宮－御影工業都市地域というように、1つの目標地域としてとらえていたことである。日本側からいけば、2市6町村にわたっていたが、アメリカ軍から見れば、1つだったのである。また、人口密度、人口増加に注目し、密度の高いところを平均弾着点とするよう指示している点も興味深い。

8月5日午前3時、第20航空軍戦闘命令（Field Order）第14号が出され、佐賀、前橋、西宮－御影、今治の4都市地域に対して、焼夷弾攻撃が命ぜられた。

8月5日付、戦術作戦任務報告（Tactical Mission Report）によると、この日の目標選定は、次のようにおこなわれた。すなわち、攻撃目標にあげられた180の工業都市のうち爆撃に成功しなかった残りの中から、目標についての

情報報告書，レーダー，時間，気象といった各要素をもとに選定し，さらに攻撃調整をおこない，この4都市地域が選ばれた。この日の条件は，夜間焼夷弾攻撃の要件を満たしていたのである。

この180の工業都市の中で兵庫県関係は，神戸，尼崎，姫路，明石，芦屋，飾磨（現在姫路市）の6市であった。そのうち，神戸は6月5日，尼崎は6月15日の攻撃でリストからはずされ，姫路，飾磨は，7月3～4日，明石は7月7日の攻撃で壊滅した。残っていたのは，西宮，芦屋両市だけだったのである。



<8月6日の爆撃>

8月5日午後5時36分、西宮－御影都市地域をめざして、一番機が発進した。この日攻撃に参加したB29は、グアム北飛行場を飛びたった第314航空団の134機（4群）サイパン・アイズリイ飛行場を飛びたった第73航空団の135機（4群）であった。第314航空団の134機には、先導機（Pathfinder aircraft）17機、レーダー対策機（RCM aircraft）2機、風程観測機（windrun aircraft）1機、救難機（super dumbbo aircraft）1機が含まれ、第73航空団の135機には、レーダー対策機2機、風程観測機1機、救難機1機が含まれていたのである。

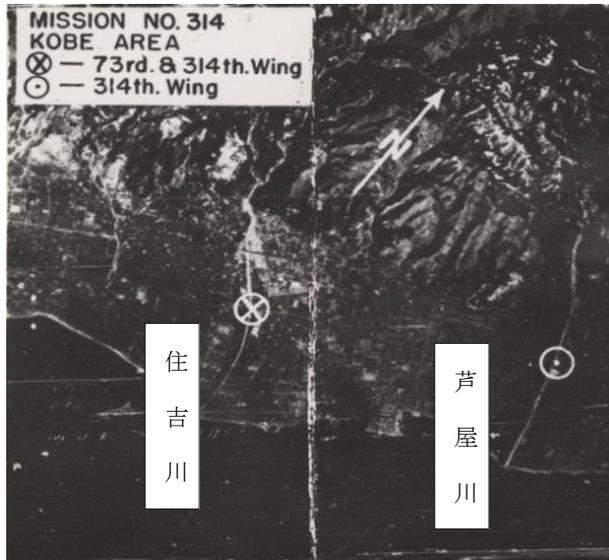
戦術作戦任務報告によると、8月6日の爆撃をアメリカ軍は、西宮－御影都市地域（Nishinomiya-Mikage Urban Area）への爆撃と称したが、この中に芦屋市が明確に含まれていた。また、戦術作戦任務報告に添付された航空写真によると次のようになる。芦屋川と国道2号線、東海道線の交差するあたり（現在芦屋市民センター付近）、西宮神社の西北、夙川の東、国道2号線と東海道線が平行に走っているあたり（現在西宮市神楽町付近）、住吉川と国道2号線の交差するあたり（現在神戸市東灘区、東灘区役所付近）の3か所であった。そして、西宮には第73航空団の4群のうち3群が、芦屋には、第314航空団の4群のうち3群が、御影には第73航空団、第314航空団の各1群が、攻撃をおこなうことになっていた。

搭載弾は、M64・6ポンド・ナパーム焼夷弾を内蔵したE46・500ポンド集束焼夷弾、M50・4ポンド・テルミット・マグネシウム焼夷弾を内蔵したAN-M17A1・500ポンド集束焼夷弾、爆発すると即座に火災を発生させ、次の機に目標を示すAN-M47A2・100ポンド焼夷弾、人員殺傷用のT4E4破片集束弾、AN-M46照明弾であった。さらに、先導機のうち航空団あたり2機には、AN-M64・500ポンド通常爆弾を搭載した。

6日午前0時25分、先導機が投弾をはじめた。御影、芦屋を攻撃した第314航空団の125機は、午前1時36分までの71分間、1万2600フィート（約3840メートル）から1万4700フィート（約4480メートル）の高さから攻撃を加えた。第73航空団の130機は、御影、西宮に午前0時38分から午前2時1分にかけて、1万1700フィート（約3570メートル）から1万6000フィート（約4880メートル）の高さから投弾した。

両航空団あわせた投下トン数は、集束焼夷弾1828.9トン、破片集束弾47.6トン、焼夷弾93.9トン、通常爆弾33.5トンであった。この結果、西宮、芦屋、御影の全市街地9.46平方マイル（約24.5平方キロ）

の29.6%すなわち2.8平方マイル（約7.2平方キロ、従来の損害をあわせると37%、3.5平方マイル）に損害をあたえたと報告されている。



▲上の写真は、8月6日未明爆撃時の芦屋・御影の平均弾着点（爆撃の中心点）を示したものの。⊙は第314航空団、⊗は第73航空団と第314航空団の平均弾着点。この写真から、芦屋を目標にしていたことがわかる。

下の写真は、戦後連合軍が写した芦屋の戦災の状況。戦災で焼失した地域がわかる。

<その他の爆撃>

前にも述べたように、この他西宮、芦屋、御影地区が爆撃を受けたのは、5月11日、6月5日、9日、15日、7月24日であった。これらの爆撃は、どのようなものであったのだろうか、続いて検討をおこなう。

5月11日の爆撃は、川西航空機甲南製作所（武庫郡本庄村、神戸市東灘区青木地区）を第一目標とした、精密爆撃であった。投下爆弾は、AN-M64500ポンド通常爆弾、午前9時53分から10時3分のわずか10分間に、92機が1,838発すなわち459.5トンの爆弾を投下したのである。そして、目標の39%を破壊あるいは損害をあたえ、北東の隣接する海技専門学校の約70%を破壊したという。

作戦任務要約（Mission Summary）によると、攻撃写真では目標の1万フィート（約3キロ）西の市街地に爆弾の落下爆発が2か所みられ、目標の東側に至近弾が数発あったと記されている。また、爆撃成果は僅少だったという。この僅少というのは、あくまで目標である川西航空機に対してであった。目標をはずれた500ポンド爆弾は、近隣の市街地に降りそそいだのである。

6月5日午前7時22分から8時47分、神戸市東部への焼夷弾攻撃がおこなわれた。530機のB29が、3079.1トンの焼夷弾を投下したのである。この結果、神戸市街地の28%すなわち4.35平方マイル（約11平方キロ）と神戸市境のすぐ北東に0.5平方マイル（約1.3平方キロ）に損害をあたえた。さらに、市外の損害として、御影では川西航空機甲南製作所の南西約0.35平方マイル（約1平方キロ）を破壊、西宮では目標XXI5001（名称不明）の北北西約0.15平方マイル（約0.4平方キロ）を破壊したと報告書には記されている。県立芦屋中学校（芦屋高等学校）の校舎が全焼したのもこの日であった。そして、以後神戸市街地は、目標リストからはずされたのである。

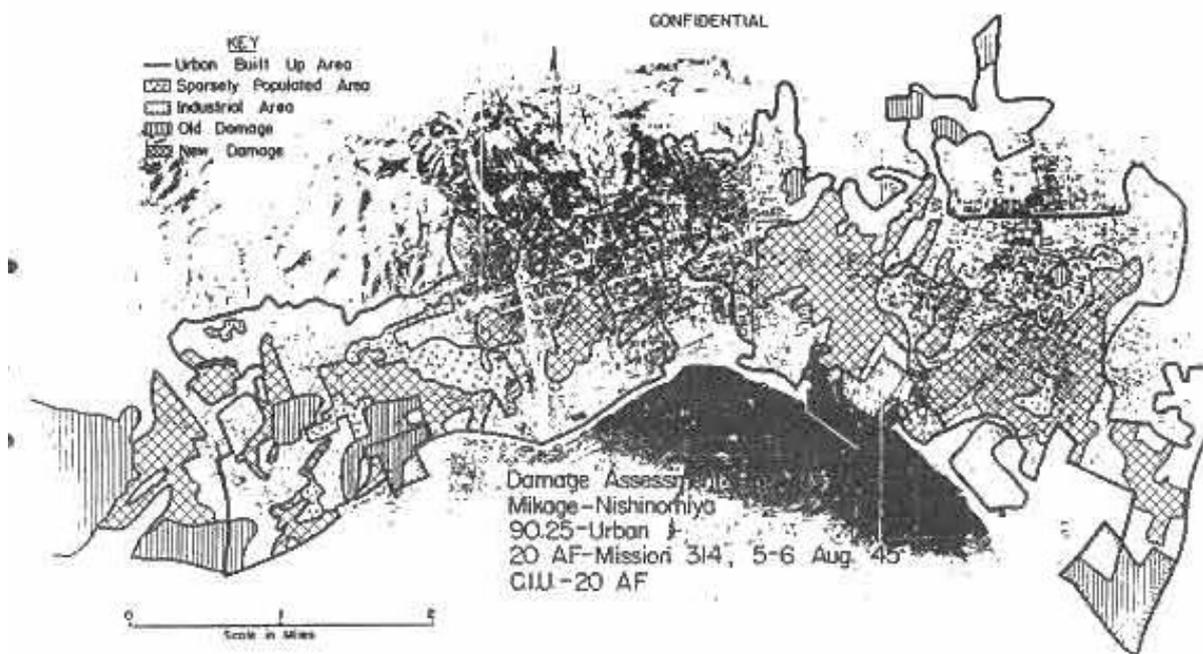
6月9日、川西航空機鳴尾製作所が精密爆撃をうけた。この日は気象条件によって、目視爆撃が可能なときは、複数の工業目標にたいする昼間精密爆撃をおこなう「エンパイア計画（Empire Plan）」の第1回目であった。

午前8時30分から9時03分の間に44機が、1000ポンド通常爆弾を投下した。この結果、攻撃時に残っていた全屋根面積の69%、約142万9890平方フィート（約13万2800平方メートル）を破壊あるいは損害

をあたえたという。

6月15日の攻撃は、大阪、尼崎の市街地をねらったものだった。この日午前8時44分から10時55分にかけて、444機のB29が焼夷弾攻撃をおこなった。この焼夷弾が、西宮、芦屋にまで落ちたと思われる。そして、この攻撃によって、大都市地域への大量焼夷弾攻撃が終了したのである。

7月24日の攻撃は、川西航空機宝塚製作所（武庫郡良元村，現在宝塚市）への精密爆撃であった。77機のB29が、午前10時33分から10時47分にかけて、450.5トンの1000ポンド通常爆弾を投下したのである。この攻撃により、西宮では仁川、段上、神呪方面に被害があったと、『西宮市史』には記されている。



<おわりに>

以上、西宮、芦屋、御影地区への数回にわたる爆撃について記してみた。8月6日の爆撃を除いて、いずれも神戸、大阪といった大都市地域への焼夷弾攻撃、航空機工場への精密爆撃のとぼっちりによるものであった。そして、8月6日は、西宮－御影地域を1つの都市地域として目標にした、焼夷弾攻撃であった。6月17日からおこなわれた、日本各地の中小都市地域に対する焼夷弾攻撃の一環だったのである。

戦後、米国戦略爆撃調査団が「大阪－神戸－京都に対する空襲の効果」の中で、大阪地方（Osaka region）がうけた爆撃について分析をおこなった。西宮、芦屋、御影地区が爆撃をうけた時期を主に略述すると次のようになる。

大阪地方では中小都市地域に対して、降伏前6週間の間、作戦任務が7つ（姫路、明石、堺、和歌山、敦賀、福井、西宮－御影）おこなわれた。947機が出撃し、7480トンの焼夷弾を投下したが、損失機数は2機だけだったという。

通常爆弾攻撃についていえば、5つの航空機組立工場に対して、1945年1月に1回、後は6月に5回あわせて6回命令され、3つの石油精製施設（尼崎に1つ、和歌山に2つ）は、作戦の終わりごろ攻撃をおこなった。大阪陸軍造兵廠ぞうへいしょうと住友金属伸銅所、プロペラ製造所（Sumitomo aircraft propeller and metal fabricating complex）は、6月24日（正しくは7月）と降伏日におこなわれたという。大阪地方では、機雷敷設出撃100機をあわせて、1200機が出撃した。そして、出撃機数の割りに、多数爆弾が投下されたのである。

効果という点では、どうであったのだろうか。初期のこの地方の航空機組立工場への精密爆撃は、疎開をおこなわせたという点で効果が大であった。精油所への攻撃は、物的損害を多くあたえたが、輸入原油はすでに減少し、尼崎での合成石油の生産もたいしたことがなかったため、日本の燃料事情には影響をあたえなかった。大阪陸軍造兵廠と住友金属への攻撃効果も、工場そのものへの物的損害という点では、精密爆撃は成功であったが、疎開による減産は、すでにその以前から見られていたという。大阪陸軍造兵廠は、さらに3月、6月での都市地域の爆撃の影響をうけていた。つまり、精密爆撃そのものの結果、生産力が低下したのではなく、他の要因によるところが大きかったのである。

中小都市地域への爆撃は、戦争終了間近で、他の要因のために減産がすでに

はじまった後のことでもあり、そのものの影響をさぐるのは困難であった。

1945年7月までの状況のもとでは、これらの中小都市地域への爆撃の影響は、地域内の戦時生産に直接影響をあたえると同様に、心理的、政治的にも重要であったと述べられている。

一方、兵庫県土木部計画課『復興誌』（1950年）によると、西宮市の罹災面積225万3000坪（約7.4平方キロ）、罹災者6万7867人（死者716人、傷者1301人）、芦屋市55万9000坪（約1.8平方キロ）、1万8171人（145人、170人）、御影地区156万8000坪（約5.2平方キロ）、5万7136人（1188人、1582人）、鳴尾村62万3000坪（約2.1平方キロ）、1万9993人（188人、235人）となっている。爆撃を受けた側からいえば、まさに「市街地全域を烏有に帰した」爆撃だったのである。

また、8月6日の戦術作戦任務報告には、リーフレット心理作戦（Leaflet psychological Warfare）と称した「伝単」（宣言ビラ）投下作戦についても報告している。

《注》

- ① この情報分析をもとに、8月5日付、戦術作戦任務報告では、目標の重要性について次のように述べた。

この都市地域は、大阪湾の北岸にある神戸の東郊外にあり、神戸、大阪にある大工場に部品を供給するための小工場（small backyard shops）にとっても重要であった。

- ② 第20航空軍A-3（作戦、計画、訓練担当）部が、作戦部長に宛てて、7月21日付で提出した「中小工業都市地域への爆撃（Attack on Small Urban Industrial Areas）」の中で、180の日本の工業都市が、あげられている。これは、人口を基準に、180都市を選んだものであった。そのうち6月15日までに攻撃を終了した東京、大阪、名古屋、横浜、神戸、川崎、尼崎の7都市が、上層部の指示により京都、広島、小倉、新潟の4都市が、さらに北緯39度以北の17都市が、リストから外された。そして、レーダーの性能から、夜間や悪天候の時に除かれる、15都市があげられた。残りの137都市の中から、密集度すなわち可燃性、軍事工業の度合、水陸交通機関の影響範囲を考慮して、優先順位を決めるものとされた。

この資料翻訳にあたって、大川哲男、工藤洋三氏「山口県の空襲と戦災、訳・解説 中小工業都市地域への爆撃」（これに180都市のリストが掲載されている）を参考にした。なお、これ以後の7月28、29日付の大垣、宇治山田、宇和島、一宮への焼夷弾攻撃、8月1、2日付の八王子、富山、長岡、水戸への焼夷弾攻撃、8月14、15日付、熊谷、伊勢崎への焼夷弾攻撃の戦術作戦任務報告にも、180の工業都市の残存地域を目標選定の際考慮の対象とした旨、記されている。

- ③ 統合統計概要では、M19集束焼夷弾となっている。これはE46集束焼夷弾と同じもので名称を変更しただけである。
- ④ 戦闘命令には、入手可能な範囲でE46、E48集束焼夷弾を、残りはAN-M17A1集束焼夷弾を搭載するものとされていた。統合統計概要によると実際は、E48集束焼夷弾（ナパーム、黄燐焼夷弾）は搭載せず、AN-M17A1集束焼夷弾も第73航空団だけが搭載、投弾した。
- ⑤ 5月11日の爆撃については、野口照正氏「1945年5月11日の神戸空襲」「歴史と神戸」147号（1988年4月）と「兵庫県下の空襲に関する米軍戦術任務報告」尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』19巻1号（1989年）が、6月5日の爆撃については、『神戸空襲に関するアメリカ軍資料・戦術作戦任務報告』神戸市史紀要「神戸の歴史」13号（1985年）が、6月9日、6月15日の爆撃については、「兵庫県下の空襲に関する米軍戦術任務報告」尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』18巻3号、19巻1号（1989年）がある。
- ⑥ 野口照正氏は、「1945年5月11日の神戸空襲」で「確実に目標に投下」したのは31機、「不確実だが目標上に投下」したのは61機、「第314航空団の40機すべて、また第58航空団は21機が不確実、第73航空団の不確実はゼロ」とされている。これは戦術作戦任務報告の **TARGET VISIBLE** を「確実に目標に投下」と、**TARGET NOT VISIBLE** を「不確実だが目標上に投下」と理解されたためと思われる。しかし、この場合、**TARGET VISIBLE** は「目視できた目標」であり、**TARGET NOT VISIBLE** は、「目視できなかった目標」のことである。「目視できた目標」に投下したのが31機、「目視できなかった目標」に投下したのが61機。第314航空団の40機はすべてと、第58航空団は21機が「目視できなかった目標」に、第73航空団はすべて「目視できた目標」に投下したのである。

- ⑦ 『米陸軍航空軍史』第5巻第21章（『横浜の空襲と戦災』第4巻に訳載、61ページ）によると、「エンパイア・プラン（帝国計画）」はレーダーを必要とする気象が予測されるときは、複数の第二次的工業都市に対し焼夷弾爆撃作戦をおこない、目視条件が予測されれば、複数の工業目標に対し昼間精密爆撃作戦をおこなうものであると説明し、6月9日、10日、22日、26日と続き、第5回目の7月24日で最後であったと記されている。一方、6月9日付、戦術作戦任務報告の序文では、「エンパイア計画」による攻撃は、気象条件が目視爆撃が許すときに、複数の精密目標に対して爆撃をおこなうものとしている。また、6月9日、10日、22日、26日の「戦略」では、一連の計画の中での作戦の旨記されているが、7月24日の戦術作戦任務報告には「戦略」の項目がない。
- ⑧ 米国戦略爆撃調査報告第58号「大阪－神戸－京都に対する空襲の効果」によると、大阪地方（Osaka region）には、兵庫県、大阪府、京都府、奈良県、和歌山県、滋賀県、福井県の7府県が含まれる。これは、日本陸軍の中部軍管区と同じ地域である。
- ⑨ 実際は、川西航空機甲南製作所が、5月11日、川西航空機会社鳴尾製作所が6月9日、姫路製作所が22日、川崎航空機明石工場が26日、川西航空機会社宝塚製作所が7月24日であった。
- ⑩ 大阪地方に落とされた爆弾総トン数は、日本全土の5分の1だが、B29の出撃機数でいえば、7分の1だったという。

佐々木 和子（県立北須磨高校講師 芦屋市三条町）

第5回 市民と考える戦争展資料

発行日 1992年（平成4年）7月24日

発行責任 芦屋市同和对策部啓発担当課

〒659 芦屋市精道町7番6号

☎0797-38-2055

印刷 総務課文書統計係印刷タイプ室

